48775

東油山古墳群

－東油山古墳Ｅ群第１次調査－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第823集

２００４

福岡市教育委員会

1
1

東油山古墳群

－東油山古墳Ｅ群第１次調査－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第823集

調査番号　０２１２
調査略号　HAK-E

２００４

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

福岡市では北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸との人、物、文化の交流が絶え間なく続けられてきました。この地の利を生かした人々の歴史を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むなか明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものも多く、学術研究上、注目されているところです。

今回の発掘調査は古墳時代後期の２基の古墳が対象となりました。石室内には多くの副葬品が残り、特に金を張った耳環や銀製、ガラス製の玉、瑪瑙製の勾玉など装身具も多く出土し、また葬られた遺体の数や配置も推測できる貴重な発見となりました。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく、多様な開発で消滅する埋蔵文化財について実施した記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力いただいた関係者各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成16年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　生田 征生

例言

1．本書は福岡市南区桧原６丁目863番２の一部において福岡市教育委員会が2002年度に実施した調査報告書である。

2．調査は荒牧が担当し、荒牧のほか藤野雅基、西島奈美、高藤洸樹（福岡大学）安成恵美（福岡大学）が遺構図面作製を行った。

3．本書に掲載した遺物実測は荒牧が行い、浄書は大石菜美子、小金丸昌代が行った。

4．出土遺物の耳環、空玉、ガラス玉の分析は比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）が行った。

5．本文は荒牧の他、１号墳のガラス玉分析を比佐が執筆し、耳環の分析表１、２は比佐が作製した。

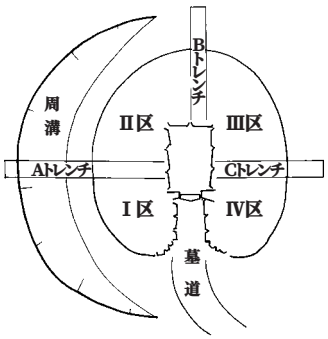
6．本書掲載の実測図、写真、遺物等、調査で得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管され、公開、活用されていく予定である。

凡例

1．本書掲載の遺構図方位は磁北による。

2．掲載した遺物は通し番号を付している。

3．本書の古墳各部名称は右図の通り。



報告書抄録

ふりがな	ひがしあぶらやまこふんぐん
書名	東油山古墳群
副書名	東油山古墳E群第1次調査
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第823集
編著者名	荒牧宏行
発行機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL092-711-4667
発行年月日	2004年（平成16年）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
ひがしあぶらやまこふんぐん 東油山古墳群 E群	ふくおか し みなみく ひばる 福岡市南区桧原 ６丁目863番２ の一部	40134	0228	33°31′ 41″	130°23′ 4″	20020425～ 20020731	598	老人保健 施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東油山古墳群 E群	古墳	古墳後期	古墳２基 小石室１基	鉄刀、鉄鏃 馬具、耳環 空玉、勾玉 ガラス玉	１号墳からは耳環12、空玉13以上 瑪瑙製勾玉１、鉄刀３など出土。 ２号墳からは耳環12個、鉄刀１ 馬具など出土。 ２号墳の墳端に小石室築造

本文目次

Ⅰはじめに…… 1
　1調査に至る経過…… 1
　2調査の経過…… 1
　3調査体制…… 1
Ⅱ位置と環境…… 1
Ⅲ調査の記録…… 3
　1号墳…… 3
　　(1) 位置と現状…… 3
　　(2) 墳丘…… 3
　　(3) 埋葬施設…… 6
　　(4) 出土遺物…… 8
　2号墳…… 17
　　(1) 位置と現状…… 17
　　(2) 墳丘…… 17
　　(3) 埋葬施設…… 18
　　(4) 出土遺物…… 23
　3号墳…… 28
Ⅳおわりに

0213　畝ヶ原遺跡
0215　桧原遺跡群
0219　東油山古墳群B群
0220　東油山古墳群C群
0227　東油山古墳群D群
0228　東油山古墳群E群
2389　桧原古墳群
2400　牧内古墳群
2409　柏原K遺跡

Fig.1　位置図（1/8000）

Ⅰはじめに

１　調査に至る経過

平成13年11月29日付で医療法人亀川内科クリニック　理事長　亀川 陽次郎 氏より福岡市南区桧原６丁目863番２の一部（敷地面積 6,381㎡）における老人保健施設建設計画を記した埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。当該地は東油山古墳群E群に含まれるため埋蔵文化財課では登録されていた２基の古墳以外の遺構の有無を確かめる踏査と試掘調査を行った。しかし、遺構は検出されなかったために、丘陵尾根線上の古墳2基のみを対象にする発掘調査として協議を重ねた。契約を交わし平成14年４月25日から発掘調査を開始するに至った。

２　調査の経過

現地協議を行い、最終的な調査範囲を決定して伐採を依頼した。痩せ尾根線上に古墳が立地し、特に尾根線より東側は急斜面で下には道路が通るため墳端際までしか伐採できず調査範囲が限られた。また、１号墳の頂部には現在も祀られている祠があり、調査期間中にこれを北側に移設して１号墳の調査にとりかかることになった。調査では祠に隣接して一字一石経を埋納した土壙（SX04）が検出された。石室調査では１号墳、２号墳ともに石室の腰石が木根により傾倒していたために安全対策に時間を費やすことが多く、サポートを挿入したり、記録作業の進行と併行して重機により石材を除去していくなど危険防止を行った。特に１号墳の右側側壁は大きく傾倒していたため、記録を一部断念し、重機により除去して床面の調査を行った。１、２号墳ともに石室はかなり破壊されていたが、床面の状態は比較的良好であった。特に１号墳では上面の玉石が多量に残り多くの遺物が出土した。このように安全対策、遺物の検出、記録作業などに時間が費やされ、予定の期間を過ぎた７月31日に終了した。

３　調査体制

調査・整理作業は以下の体制で臨んだ。

（調査主体）福岡市教育委員会　（調査総括）埋蔵文化財課長　山崎純男　調査第２係長　田中寿夫
（庶務）文化財整備課　御手洗清　（試掘調査・協議）事前審査係長　池崎譲二　担当　大塚紀宜
（前任）（調査担当）荒牧宏行　（調査作業員）榎田信一　豊丸秀仁　松井一美　知花繁代　真田弘二
井口正愛　永隈和代　西野光子　森下初美　野崎賢治　岡部静江　西嶋奈美　高藤洸樹（福岡大学）
安成恵美（福岡大学）　（資料整理）松下伊都子 金丸幸加 小金丸昌世 大石菜美子　相原聡子

なお、調査にあたっては市川建築設計事務所の方々に条件整備をはじめ色々と協力を頂いた。記して感謝します。

Ⅱ位置と環境

油山（標高597m）から派生した丘陵には200基以上の群集墳が築造されている。これらは福岡大学考古学研究室によって現況の記録集成が行われている。（小田富士雄、武末純一『油山山麓古墳群の研究(1)～(3)』福岡大学人文論叢）本調査区を含む東油山古墳群はA～F群までをグルーピングし登録しているが、開発により消滅した古墳も多い。周辺の既往の調査では柏原古墳群A～J群25基（市報125集1986）と桧原古墳群２基の調査（市報540集1997）がある。

立地

丘陵先端近くの尾根線上に立地する。標高29～35mを測り、南側は造成により崖面を呈し、東側は急斜面を呈している。西側は比較的緩やかな斜面で谷状の地形が４筋ほど見受けられる。古墳は現状では確認できないが、西側斜面裾部に存在していた可能性もある。

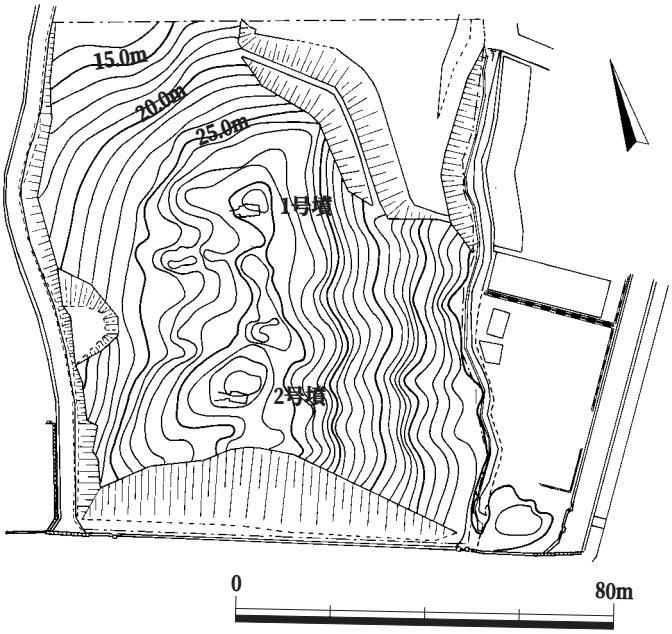


Fig.2　調査区現況図（1/1,600）

Ph.1 1号墳現況（南から）

Ph.2 2号墳現況（北から）

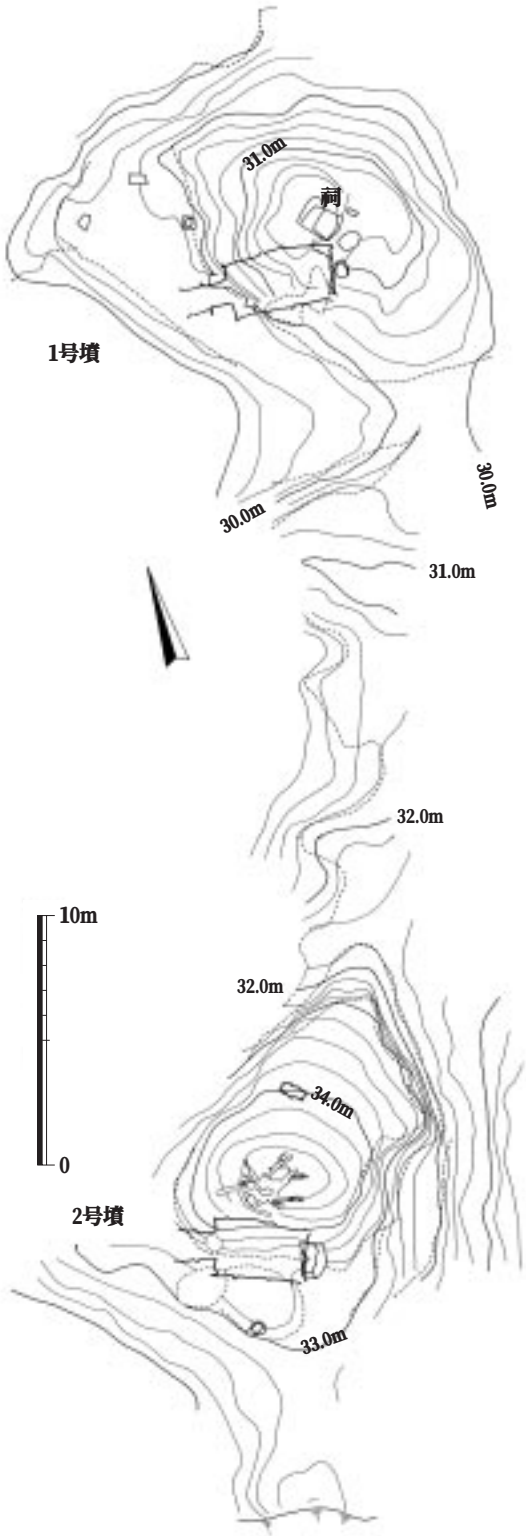


Fig.3　1号墳、2号墳現況図（1/300）

Ⅲ　調査の記録

１号墳

(1) 位置と現状

北へ派生した尾根の先端に立地する。調査前の現状は頂部に石室の天井石を転用した祠が祀られ、西側の墳端は歩道状に大きく削られていた。また、墳丘も、南側の鞍部から祠へ上っていくような歩道状の削平がみられた。

(2) 墳丘（Fig.4）

北側は比較的盛土が良好に遺存し、Aトレンチで玄室中心から6.6mの位置が墳端と考えられる。Bトレンチでもほぼ同じ6.8mの距離に墳端を見出すことができる。また、地形変換点を平板測量した墳端はⅠ、Ⅱ区では７m前後になる。南側の墳丘は大きく削平され、盛土が流失し地山が露出している部分がある。墳丘はこの谷部を埋めていく方法で築かれたものとみられる。Ⅲ区の谷頭付近で南側へ立ち上がった位置に暗黄褐色土からなる溝状の遺構が検出された。遺物は皆無であったが、周溝の可能性があり、南から南東側にかけて尾根線を切断し馬蹄形状に掘削されていた可能性がある。しかし、東側は急斜面であったために墳端近くまでしか発掘はできず、その溝状遺構全体の形状を明らかにすることはできなかった。Cトレンチで観察できた溝状遺構の北側（墳丘側）は石室中心から8.5mの位置にあり、Ⅰ、Ⅱ区の墳端の位置より長くなる。

西側は特に墓道近くの墳丘が崩れているが、Ⅰ区では標高29.25mのラインで墳端が巡るとみられる。東側に比べるとやや短い径で墳端は墓道にかかる。以上から墳丘は南北に径約15.5m、東西に径約12.5mの楕円形のプランに復元できる。

地山成形（Fig.5）

Fig.2にみられる下方から大きく抉りこんだ墳丘南側の谷と丘陵頂部を主に成形している。石室は

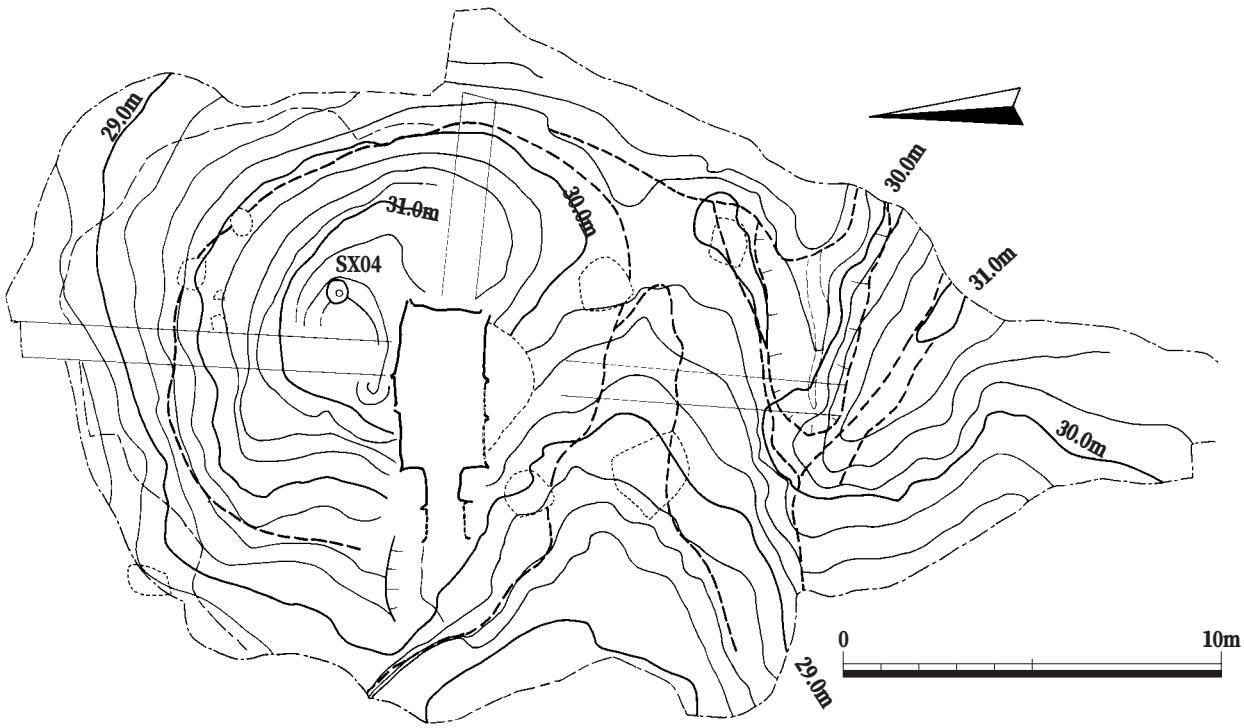


Fig.4　１号墳墳丘測量図（1/200）

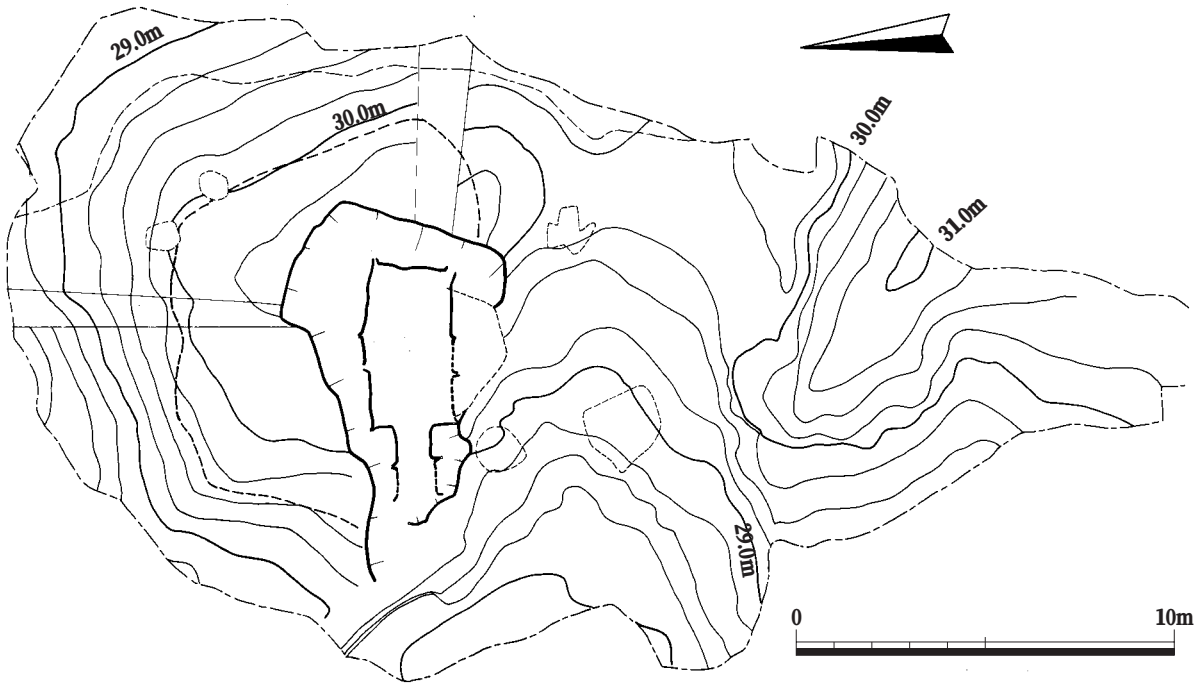


Fig.5　１号墳地山成形測量図（1/200）

平坦に近く成形した丘陵頂部中央から南西寄りに構築されている。これは東側の丘陵斜面が急勾配であるためと考えられる。さらに、先述の馬蹄形状と推定される溝を南東側に掘削し墳端を限る。

盛土

盛土が良く残るAトレンチの観察では、まず炭を含む旧表を残し平坦に成形した地山面を造る。次にその地山面の上にマサといわれる灰白色風化花崗岩の砂質土からなる盛土を水平もしくは石室掘方へ層厚を増して、赤褐色土が混じる盛土と互層にして重ねる。（21～26層）締まりが良い砂質土を多く用い、異なる土質の盛土と互層にすることによって石室の基礎となる腰石を固めたものと考えられる。次段階で石室側に高い勾配をもった盛土を積み上げる。この盛土も下層ほどではないが、地山の灰白砂質土を主体としたもので、墳丘の核として固めた１次墳丘ともいえるものである。（14層～20層）最終段階で赤褐色粘質土を主体とした盛土で整形し仕上げる。（5層～13層）Bトレンチも旧表が残る地山成形面

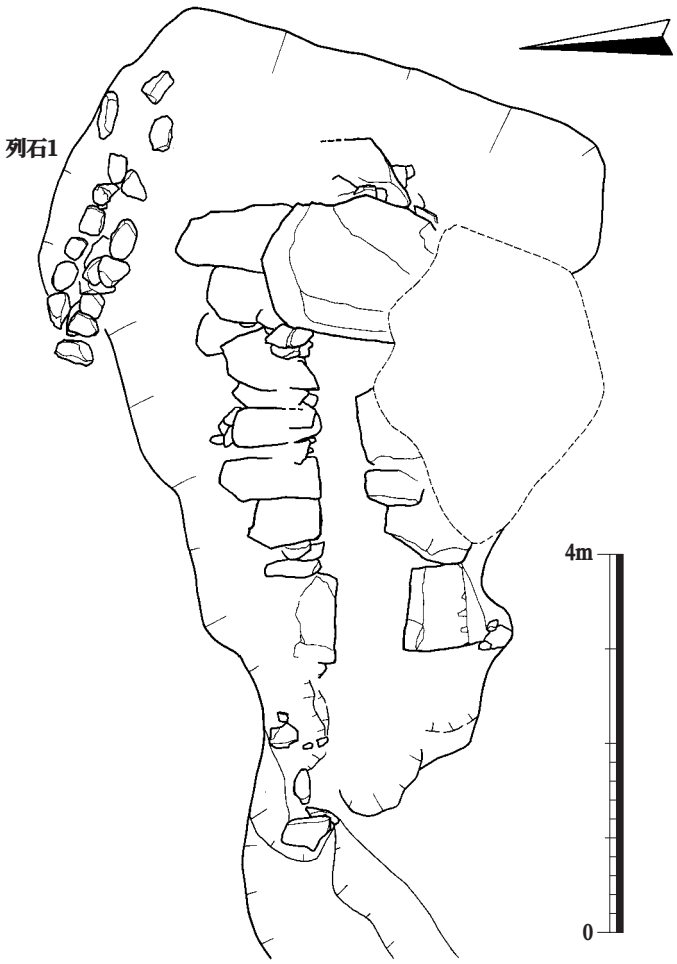


Fig.6　１号墳石室俯瞰図と掘方平面図（1/80）

Ph.3　1号墳墳丘遺存状況（南から）

Ph.4　1号墳玄室奥壁（西から）

Ph.5　1号墳上面床面（西から）

Ph.6　1号墳下面床面（西から）

Ph.7　1号墳玄室内鉄刀175、176

Ph.8　1号墳玄室内勾玉113、空玉（18～30）、
ガラス丸玉（32～36）出土状況

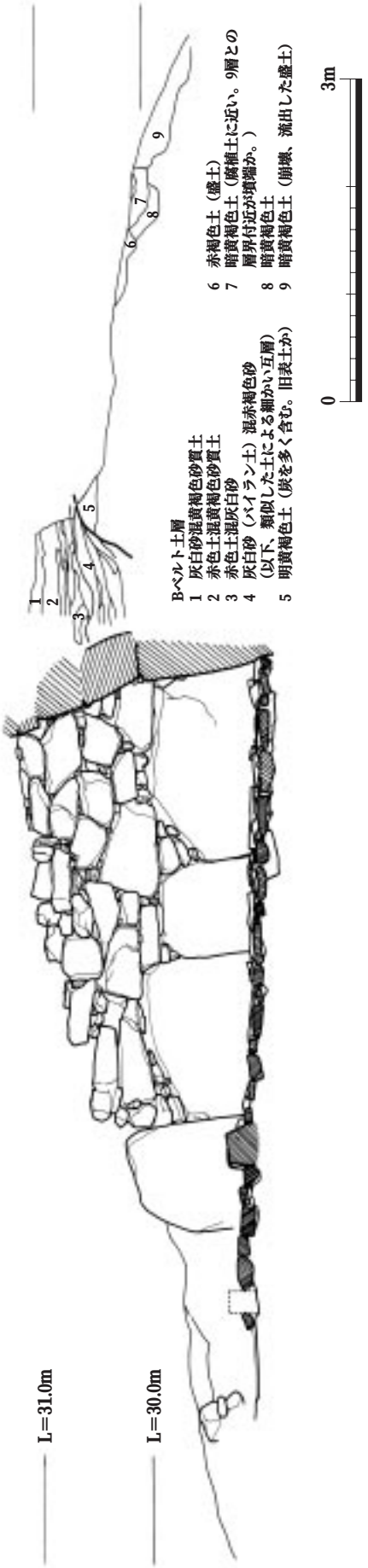


Fig.7 １号墳墳丘断面図（Bベルト　1/60）

に盛土を積み上げるが、ベルトの一部が崩壊し記録できなかった部分がある。9層は周溝埋土の可能性があり、Ⅲ区の溝状遺構に続くものとみられる。石室掘方内は灰白色のマサ土と赤褐色粘質土の細かい互層で固める。Cトレンチでは谷部の盛土は流失し、南側上端に幅2.2mの周溝とみられる溝が検出された。谷部の墳丘は南側は土堤状になるため崩壊が防げると考えられるが谷筋の西側へは崩落流失を生じている。

墳丘内列石（Fig.6）

Ⅱ区の石室近くで検出された。墳丘内の天井石とほぼ同レベルに置く（Fig.8のAトレンチ土層参照）。延長3.3m、２列に30～40cm大の花崗岩を１ないし２段配列している。規模や位置から墳丘を保持するものではなく、石室構築の完了にともなう祭祀行為に関係しているものと思われる。

（3）埋葬施設

主軸方位をN（磁北）－84 °－Wにとり西に開口した両袖横穴式石室を内部主体とする。玄室、羨道部を含めた主軸長は604cmを測る。

石室掘方

奥壁側に広い略三角形プランを呈す。深さは約1.8mを測り、掘方上端のレベルは奥壁で２段目上部、側壁で３段目上部にあたる。掘方内埋土は先述の通りである。

玄室

奥幅220cm、前幅210cm、右側壁長405cm、左側壁長432cmを測る。右側壁は木根によって倒壊し、実測不可能であった。腰石を奥壁に1石、側壁に3石配置する。奥壁は腰石１石を含め３段積み上げ、さらに天井石のレベル調整に小振りの石を最上段に置く。天井石が奥壁側に１石倒壊して架かり、敷石から天井石までの高さ215cmを計測できた。床面は30～40cm大の平石を多く用いて敷き詰め、その直上に10cm以下の玉石を置く２面構造を検出した。玉石はレベルが低い奥壁側に厚く３段程度重なり、左側壁側や羨道側では疎らに薄くなる。この玉石下の遺物は耳環１点のみで、さらに平石との間に土の堆積をほとんどみないことから時期差のある床面の貼替えではなく一体の施設とみられる。また、玉石上に20cm大の平石が奥壁に平行した状態で３列飛び石状に検出された。追葬時の区画に係わる施設の可能性がある。

Fig.8 1号墳墳丘断面図（A、Cベルト 1/60）

羨道部

右袖石の上部は矢が入れられ割られているが、袖石まで遺存し、側壁は抜き取られている。しかし、側壁腰石の抜け穴が残り、袖石を含め２石で構成していたことが知れる。また、羨門の仕切石は抜き取られているが根石が残り位置と大きさを知ることができる。羨道の幅は玄門、羨門側ほぼ変わらず100cmを測る。長さは両仕切石を含め173cmを測る。床面は玄室同様の２面構造である。

前庭部・墓道

左側壁に積石が若干残る程度で破壊されている。左側壁の掘方からも、２号墳同様の短いハの字に開く積石が構築されていたものと考えられる。閉塞施設と判断でき元位置を留めるものは無い。前庭部床面には地山に近似した整地土が浅く残る。前庭部から接続する墓道は西側の谷へ下降していく。

（4）出土遺物

出土状況

玄室から土器は少ないが玉類、鉄器が多く出土した。羨道部は破壊されているため、遺物は若干量で元位置をとどめない。玄室の遺物の大半が床面玉石上ないし、玉石間から出土した。その平面分布をみると完形11個の耳環が中央部から奥壁側にかけて出土し、概ね同タイプの２個体がセットになっている。これは出土位置がおよそ元位置を留めていることを示す。前項で記した区画の平石と考え合わせると、中央部に置かれた屍体は奥壁に平行にして頭位を右側壁側に向けていたと推定される。しかし、奥壁際の中央に玉類を多く伴い出土した耳環７、８を付した屍体は位置から初葬の可能性があり、スペースを考慮すると主軸方向に置かれていたものと考えられ、また、同じく玉類を多く伴う耳環16、17を装う屍体は主軸方向に置かれていたか若しくは頭位を左側壁側に向けていたと推定される。このような屍体の配置であれば、耳環16、17を付けた屍体と耳環13、14の屍体が重なる他はそのスペースにほとんど重複がない。

Fig.9　１号墳石室上部床面実測図（1/60）

刀は右側壁際に大刀（174）を１振、奥壁右隅角に立て掛けた状態で２振（175、176）出土した。前者は鋒を奥壁側に向けて置かれ、後者は鋒を上にして、下端は玉石より10cm弱浮いた状態であった。大刀174の羨道側に右側壁に接して束ねたような状態で元位置を留める長頸鏃が出土した。

遺物が片づけられて集中する範囲は奥壁際左隅角と左袖石前の隅角の２箇所である。

土器（Fig.12）

図示した１～６は須恵器である。土器１、２はヘラ記号からセットになる坏である。奥壁左隅角から破片が広がった状態で出土したが、接合し完形となった。３は右袖石前から出土した完形品。４は

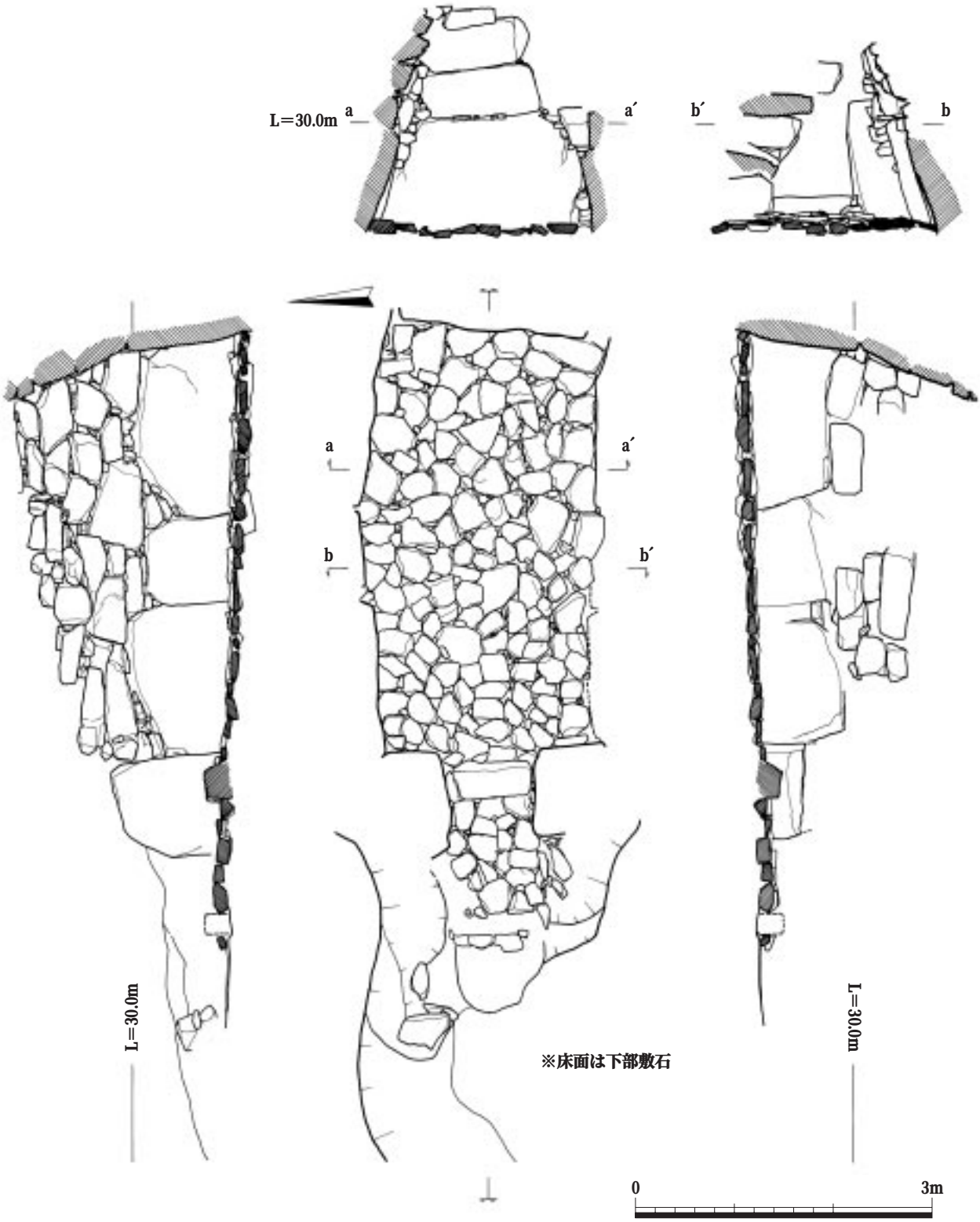


Fig.10　1号墳石室実測図（1/60）

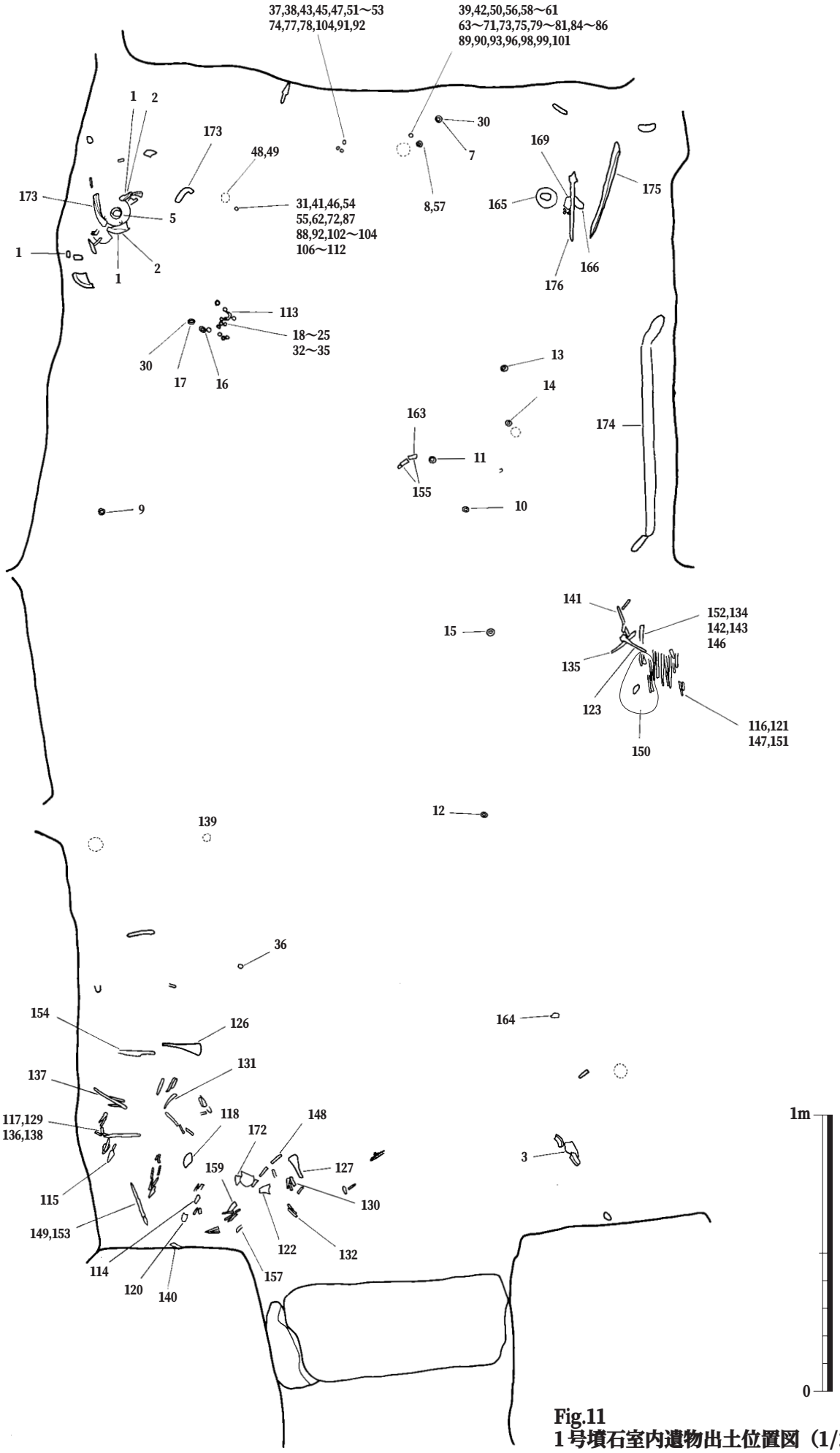


Fig.11
1号墳石室内遺物出土位置図（1/20）

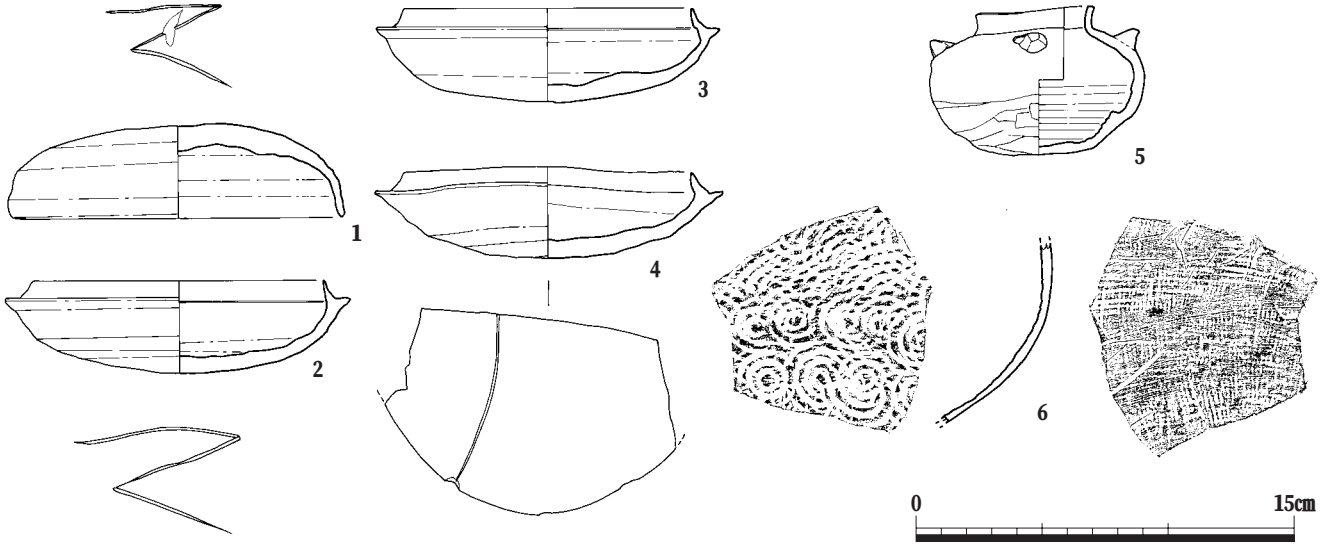


Fig.12 １号墳出土遺物実測図１（土器　1/3）

遺物番号	断面	形態	分析の所見	観察の所見	想定される製作技法
耳環7	中実	中細	芯材は銅を主成分とするが若干の鉛も検出される。外表は強い金のピークの他、若干の銅、銀が認められる。	外表は破れているものの腐蝕は見られない。開口部は破損により観察不能。	銅芯－金（＋銀）薄板巻き
耳環8	中実	中細	芯材は銅を主成分とするが若干の鉛も検出される。外表は強い金のピークの他、若干の銅、銀が認められる。	外表は破れているものの腐蝕は見られない。開口部は不明瞭ながら金属薄板の絞りが見られる。	銅芯－金（＋銀）薄板巻き
耳環9	中実	中細	芯材は銅を主成分とするが若干の鉛も検出される。外表は強い金のピークの他、若干の銅、銀が認められる。	外表は破れているものの腐蝕は見られない。開口部は破損により観察不能。	銅芯－金（＋銀）薄板巻き
耳環10	中実	中細	芯材はほぼ銅のみ。外表は強い金と微弱な銅、銀が認められる。	外表は破れているものの腐蝕は見られない。開口部は破損により観察不能。	銅芯－金（＋銀）薄板巻き
耳環11	中実	中細	芯材はほぼ銅のみ。外表は強い金と微弱な銅、銀が認められる。	外表は破れているものの腐蝕は見られない。開口部には金属薄板の絞りが見られる。	銅芯－金（＋銀）薄板巻き
耳環12	中実	太	芯材はほぼ銅のみ。外表は強い金の他、微弱な銅、銀が検出される。	表層は非常に光沢のある金薄板で覆われ、開口部の絞りも明瞭。	銅芯－金（＋銀）薄板巻き
耳環13	中実	太	芯材は銅を主成分とするが微弱な金が検出される（原因不明）。外表は銀とその腐蝕成分である臭素が認められる。	全体に腐蝕が著しいが、芯材に金属の薄板を巻いている。開口部の状況は不明。	銅?芯－銀薄板巻き
耳環14	中実	太	芯材はほぼ銅のみであるが、砒素を含む可能性有り。外表部では銅、銀の他、金、臭素が見られる。	全体に腐蝕が著しいが、芯材に金属の薄板を巻いている。開口部の状況は不明。	銅?芯－銀薄板巻き
耳環15	中実	太	芯材は銅を主成分とするが、若干の鉛を含む可能性有り。外表は（銅、）金、水銀、銀が検出される。	淡い金色と銀色が斑になる。開口部には金属薄板の絞りが見られる。	銅芯－銀薄板巻き－鍍金
耳環16	中実	太	芯材と思しき部分では銅と若干の鉛、銀を検出、外表では銀、臭素を中心に銅を検出。銅と銀は芯と外表で影響しあっているものと思われる。	表面は全体に腐蝕生成物に覆われ詳細不明。	銅芯－銀薄板巻き
耳環17	中実	太	芯材はほぼ銅のみ。外表では銅の他、銀、水銀、金を検出。	表層の残存部では淡い金色と銀色が斑になる。開口部には金属薄板の絞りと思われる凹凸が見られる。	銅芯－銀薄板巻き－鍍金

表１　１号墳出土耳環 分析・観察表

玄室埋土と右袖石裏の撹乱土から出土した破片。５は奥壁左隅角から出土した完形品である。体部肩に４箇所に退化した耳状の突起を貼付ける。６は破壊された羨道部の埋土から出土した甕破片。

耳環・玉類（Fig.13）

出土地点から（７－８）、(10－11)、(13－14)、(12－15)、(16－17）のセットが考えられる。９は出土地点が離れるが形態、製作技法は７、８と近似する。18～28の銀製空丸玉は耳環16、17に近くか

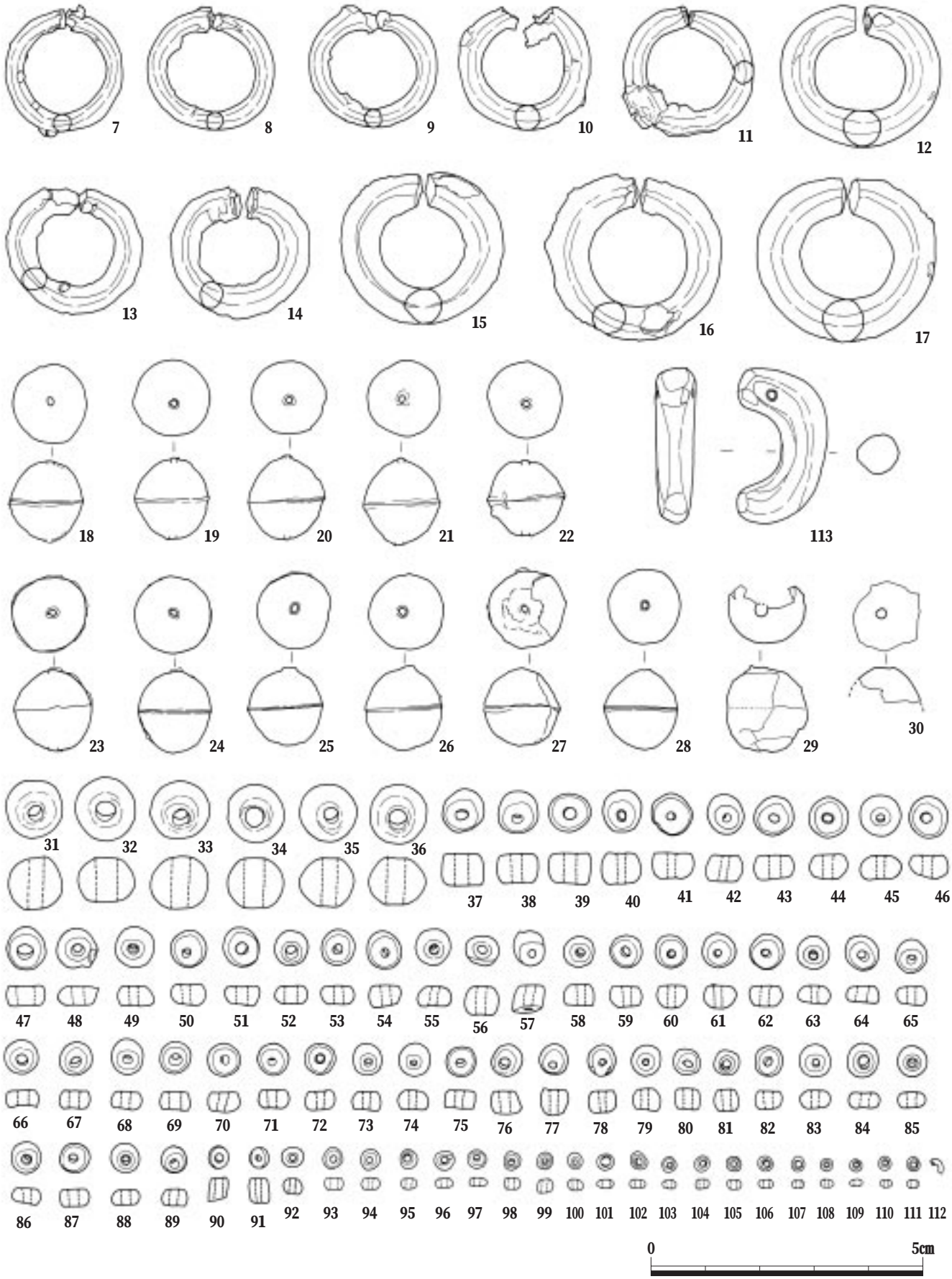


Fig.13　1号墳出土遺物実測図2（玉類　1/1）

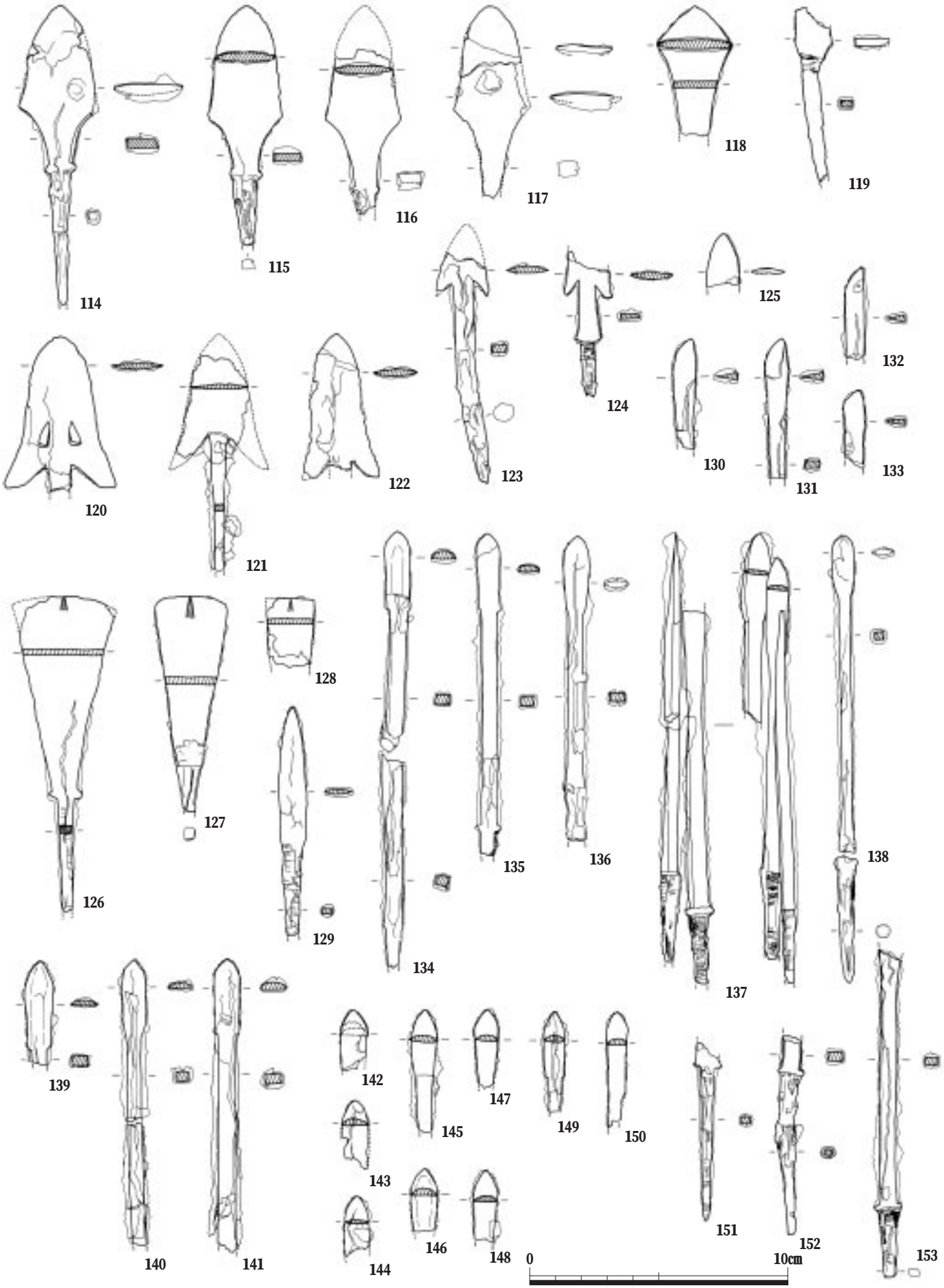


Fig.14　1号墳出土遺物実測図3（鉄鏃　1/2）

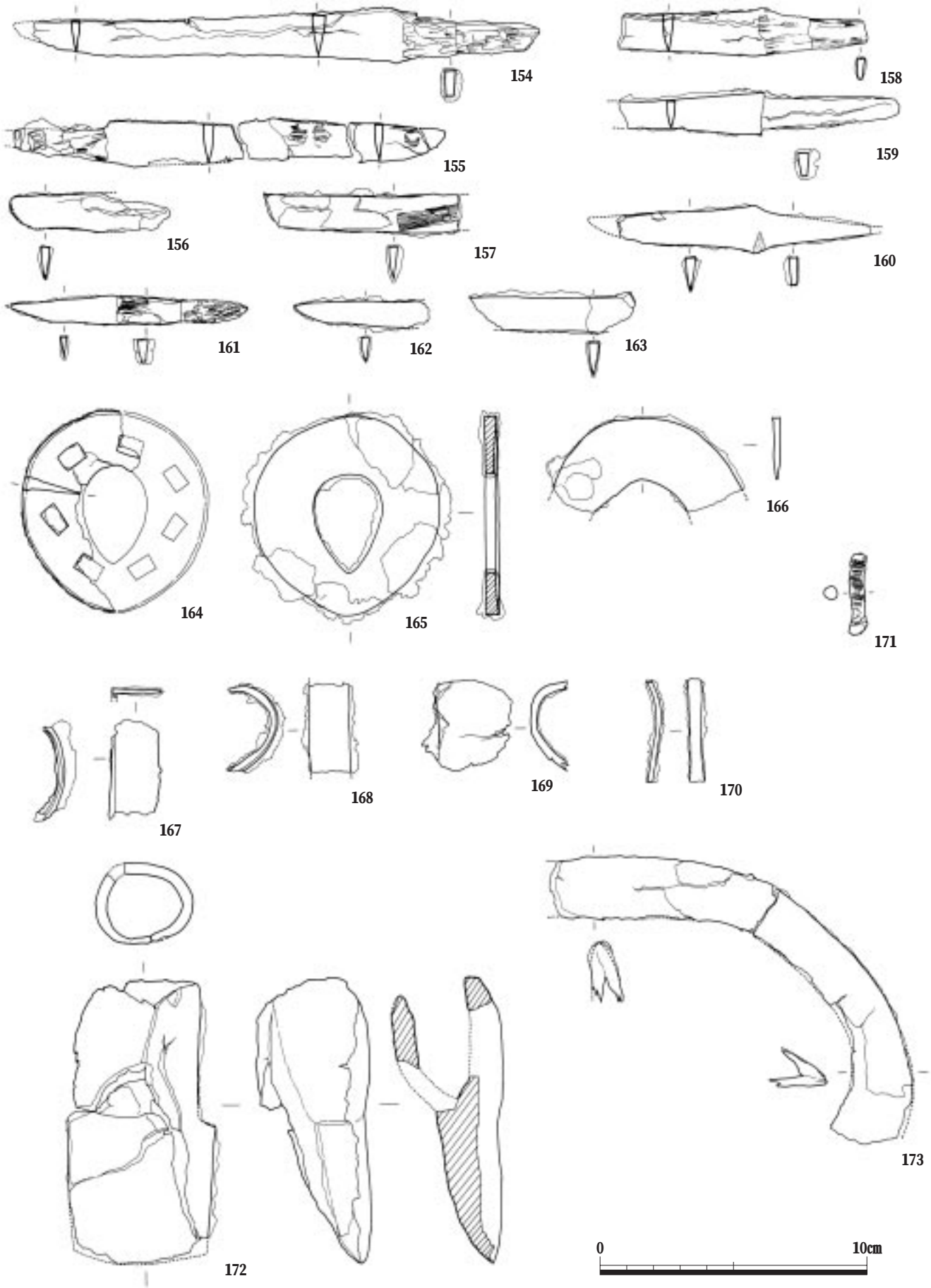


Fig.15　1号墳出土遺物実測図4（鉄器　1/2）

ら113の瑪瑙製勾玉を親玉にした状態で集中して出土した。(Ph.8)ガラス丸玉32～36を伴っているが、その組み合わせは判然としなかった。しかし、接して出土したものもあり、同じ空玉を連結していた可能性がある。大きさは中央の最大径13.2～13.7mm、長さ13.3～14.6mmを測る。両端には１mm前後の孔を有す。図示した11個体のほか、破片が３個体以上出土している。29、30は金銅製で２個体出土した30の出土地点は耳環17の近くから出土し、29とともに耳環の垂飾とした可能性がある。また、この位置から未鑑定であるが歯も出土した。ガラス玉の31～36（丸玉）は青紺色に発色し、径11mm、厚さ8.2～9.6mm、孔径3.4mm前後を測る。ガラス小玉41、46、54、55、62、72は丸玉31とともに耳環16、17よりやや奥壁側に離れた位置で出土した。その他のガラス小玉、粟玉は奥壁中央の耳環７、８の周辺から出土した。分析では総てアルカリ珪酸塩ガラスに分類され、その中でカリガラスが９点ある。残りはソーダ石灰ガラスであるが、これらは細かくみると大型の丸玉や、片側小口が表面張力で丸く、反対側の小口は凸凹になったものは概して低アルミナタイプに、小型で青緑色を呈するものは高アルミナタイプに属するものが多いようである。１点のみ赤色小玉95は高アルミナタイプのソーダ石灰ガラスに属すると考えられる。製作技法的には気泡の流れなどから大型の丸玉（31～36）は巻き付け技法、それ以外は管ガラスを切断し、再加熱したものと考えられるが、今回は大雑把な観察によるもので推測にすぎない。ただ、アルカリ珪酸塩ガラスで巻き付けにより製作されたものはこれまでみた中では希少な資料である。

鉄器

鉄鏃が左袖石前と右側壁中央の際に集中して出土した。前者の位置からは、長頸鏃13個以上、以外の平根タイプのもの8個が後者の位置からは長頸鏃20個以上、以外の平根タイプのもの4個以上が出土した。図示した平根の116、121、123は右側壁側から119、124、125、128は玄室埋土から出土し、他は左袖石前からの出土である。130～133は片刃の長頸鏃、134～150の長頸鏃の鏃身断面は不明確なものもあるが、片丸造が多い。刀子は大（154、155）、中（160）、小（161）がみられる。鐔164は右袖石前の隅角から敷石（上面玉石）より12cm浮いた位置で出土。7箇所の方形透かしが推定される。165、166は出土地点から鉄刀175、176に伴う。167～169は鎹、若しくは鞘口金具である。167は右側壁の埋土から、168、169は鉄刀175、176周辺から出土。170は責金具である。174は遺存長92.6cmを測るが切先が錆で崩壊している。弓金具171は筒状にした皮金に両端を丸くした棒（芯金）を通したもので桧原１、２号墳からも出土している。皮金には木質が残る。172の

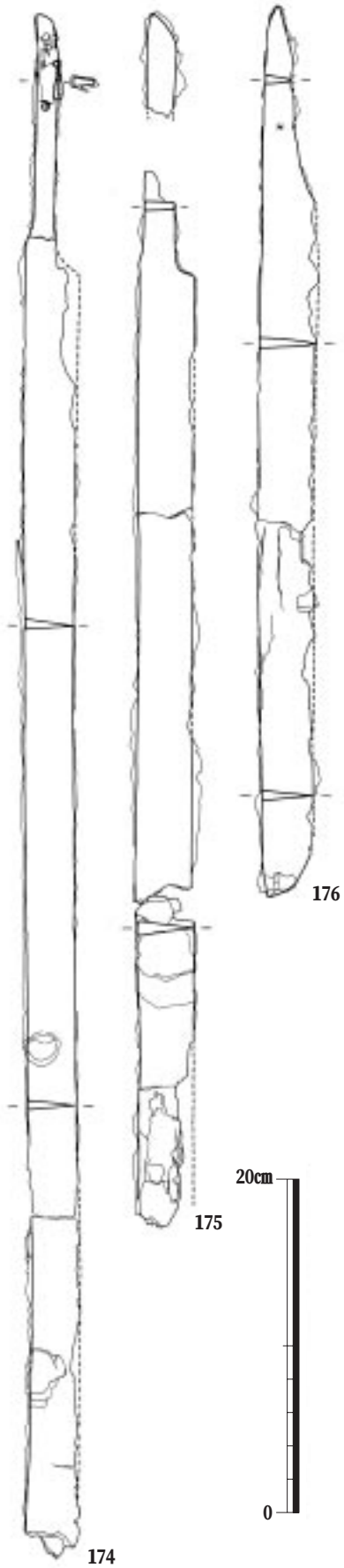


Fig.16　１号墳出土遺物実測図５
（鉄刀　1/4）

鉄斧は錆による崩壊が進み刃部が開いている。左袖石隅角からの出土。173の鋤先は奥壁左隅角から出土した。

Ph.9　2号墳石室全景（西から）

Ph.10　2号墳3、4区地山面（北西から）

Ph.11 2号墳床面検出（西から）

Ph.12 2号墳右袖石隅角遺物出土状況（北東から）

Ph.13 2号墳Aトレンチ（3号墳検出　北西から）

Ph.14 3号墳（天井石除去　南から）

２号墳

(1) 位置と現状

１号墳と同じ丘陵尾根筋に立地し、１号墳と石室中央間で39m離れている。調査前の現状は石室北側の丘陵頂部を残し、周囲が崖状に削られていた。

(2) 墳丘

地山成形

丘陵頂部に平坦面を造りだすことが主作業となっている。東側及び、南西側は急勾配であったために、平坦面を広く造ることができず、盛土は流出している。

盛土

石室より南側の墳丘は壊滅的に削平されていた。残りが良いAトレンチで観察すると34層の旧表土を残し石室中心から4.5mまでの範囲を平坦に成形する。次に石室に比べ余裕がある、玄室中心から３m離れた位置から石室掘方を掘削する。掘方上端から腰石上面に向けて比較的緩やかな勾配で掘削されている。掘方の腰石下は発掘しなかったが、腰石の規模から鋭角な角度に変えて掘削された２段掘り状になっているものと考えられる。掘方内は灰白マサ土を用いて固めている。次段階の作業で灰白マサ土（18、24層）を旧表土上に積み上げて背後を固め内部にバイランを含む淡明赤褐色土を細かく積み上げた核となる墳丘を成形する。最終段階で単位が大きい赤褐色土の盛土を積み上げて整える。Aトレンチの墳端に石積が検出され、当初、外護列石かと思われたが、後に小石室（３号墳）であることが判り、墳端の 6～11層は３号墳の盛土と考えられる。従ってAトレンチからは２号墳築造時の墳端の位置を知ることができないが、墳丘や地山の形状から判断して玄室中心から６ないし７mの３号墳が構築された位置にあったものと考えられる。

Bトレンチでは石室近くが地山面まで削平されている。地山は下部の軟岩質になった灰白色の風化花崗岩（バイラン）で旧表は無く、勾配のある地山成形面になっている。玄室中心から5.9mの位置に変換点があり、鋭角に落ちていくが、急勾配であるために調査区が限られ、その延長を追うことはできなかった。

Cトレンチも削平が著しく、地山上に堆積している41層も地山に近似し、２次堆積とみられる。墳端の位置は明確ではないが、玄室中心から６mの位置に地山の弱い地形変換点がみられる。以上のトレンチ観察お

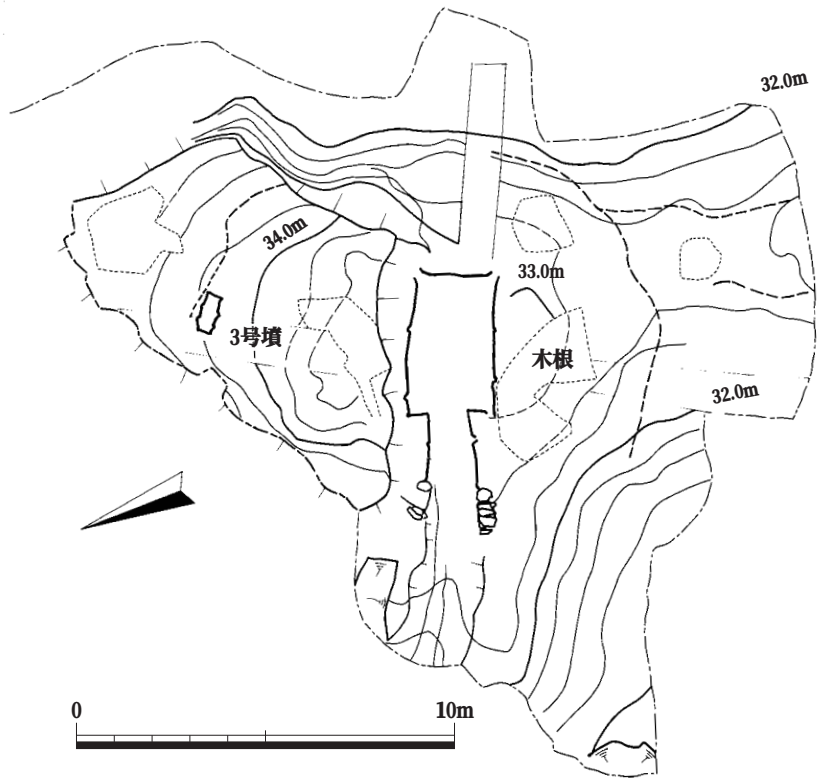


Fig.17　２号墳墳丘測量図（1/200）

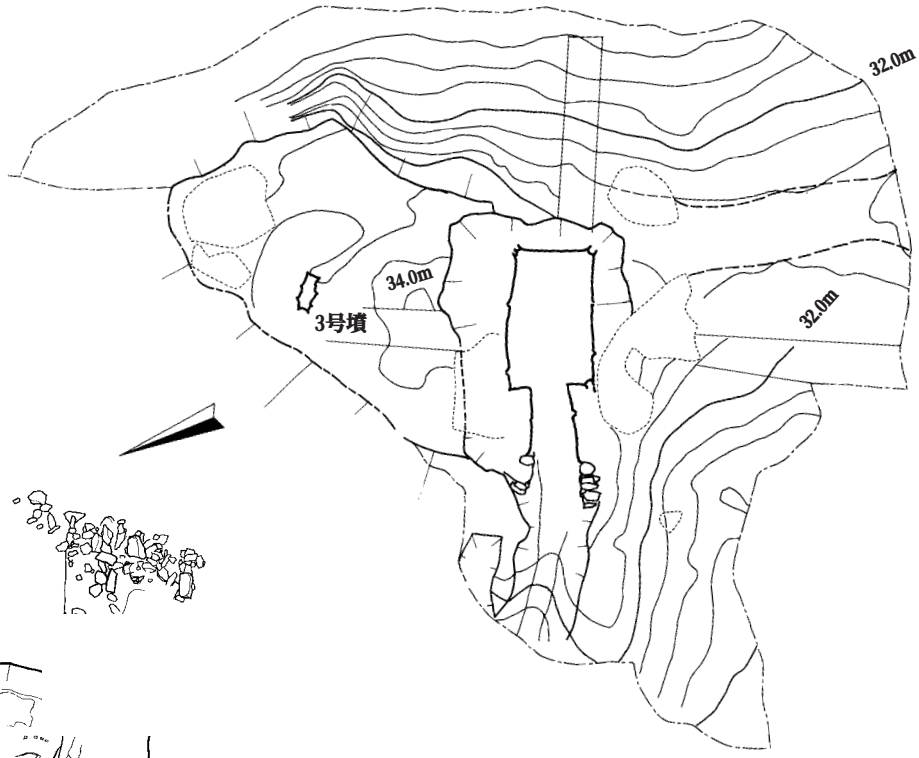


Fig.18　2号墳地山成形測量図（1/200）

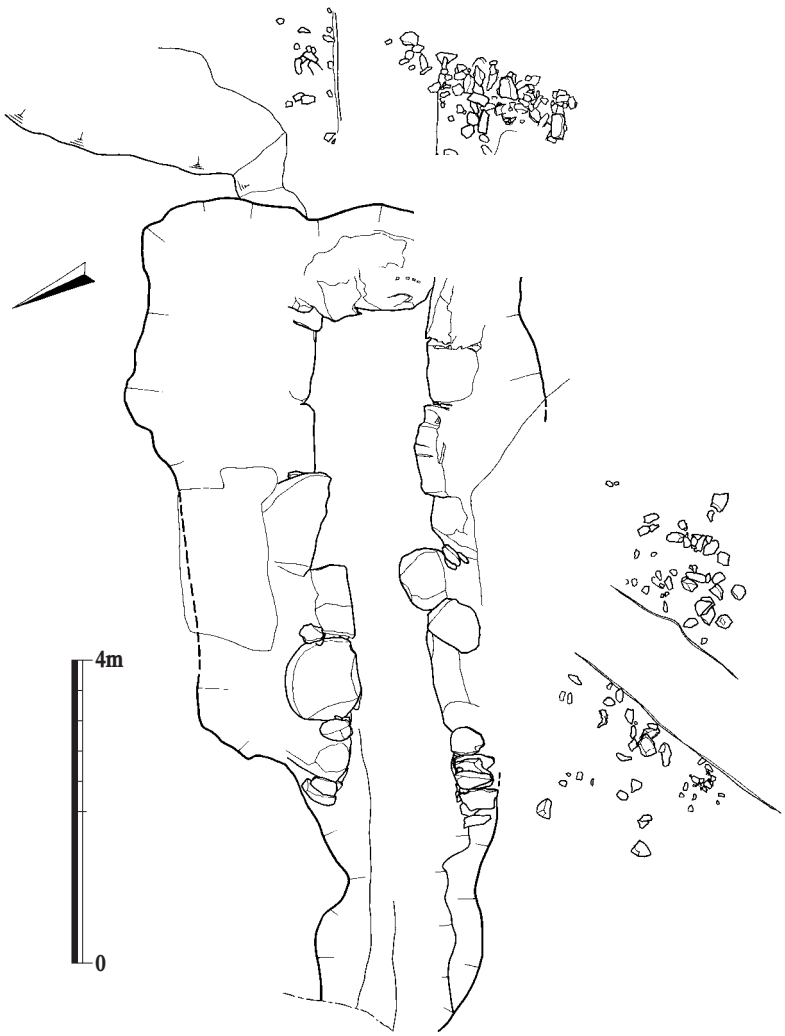


Fig.19 2号墳石室俯瞰図と掘方平面図（1/100）

よび、平板図による形状から墳丘規模は南北径13～14m、東西はやや短い径12mになると推定される。

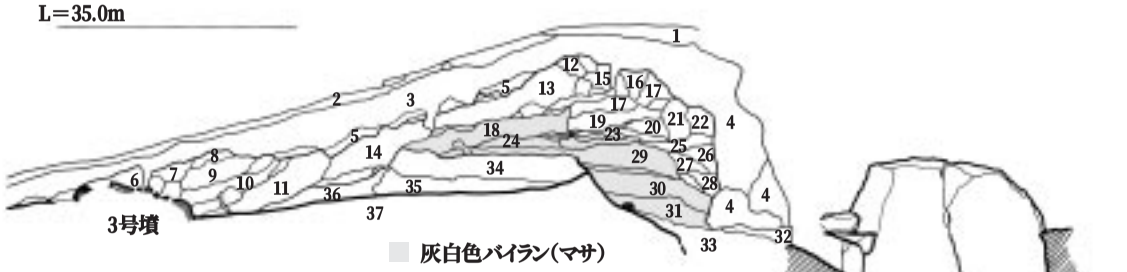
列石状遺構

　墳丘を検出していく作業においてBトレンチ周辺およびⅣ区において10～30cm大の小石が石室の周囲を孤状に分布しているのが検出された。レベルは地山から５cm程度浮いた位置であるが、検出された地点には墳丘がほとんど見受けられない。破壊された石室石材が流出した分布とも考えられるが、石材の大きさが比較的一定し、Bトレンチ周辺のように整然と並ぶ箇所も見受けられることから、記録し、図示した。なお、Bトレンチ周辺では小石に混じって甕破片が出土した。

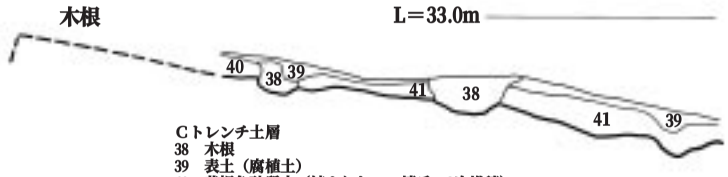
（3）埋葬施設

　主軸方位をN（磁北）－64 °－Wにとり西北西に開口した両袖横穴式石室を内部主体とする。玄室、羨道部を含めた主軸長は552cmを測る。

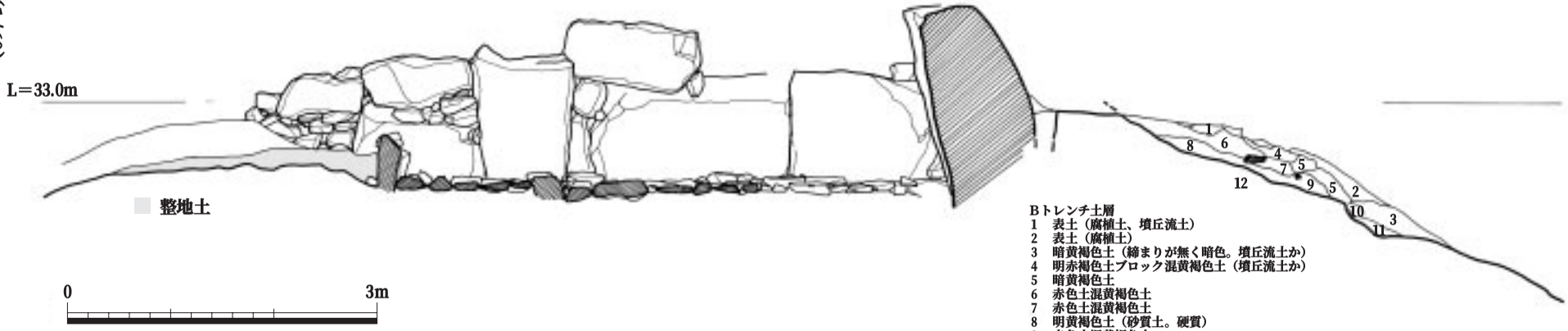
石室掘方（Fig.19）



Aトレンチ土層
1　木根
2　表土（腐植土）
3　暗黄褐色土（墳丘流土）
4　墳丘崩落土
5　明黄褐色土（墳丘流土、硬質）
6　淡黒色土混赤褐色土
7　淡黒色土混赤褐色土
8　赤褐色土
9　赤褐色土
10　赤褐色土
11　赤褐色土
12　赤褐色土（白色バイランが多くなる）
13　赤褐色土
14　赤褐色土
15　赤褐色土
16　赤褐色土（根により攪乱）
17　淡明赤褐色土（バイランを多く含む）
18　灰白色バイラン土
19　淡明赤褐色土（バイランを多く灰白色に近い）
20　淡赤褐色土混灰白バイラン土
21　明黄褐色土（根により攪乱）
22　淡明黄褐色土
23　淡赤褐色土混灰白バイラン土
24　灰白バイラン
25　灰白バイラン土混淡赤褐色土
26　明黄褐色土
27　明赤褐色土
28　明黄褐色土
29　灰白バイラン
30　灰白バイラン
31　灰白バイラン
32　淡赤褐色土
33　明黄褐色砂質土（黒色土を縞状に挟む）
34　淡明黄褐色土（旧表土。締まりがなくフカフカ。炭化物多く含む）
35　明赤褐色土（地山。軟岩に近い）
36　明赤褐色土（地山。軟岩に近い）
37　明黄褐色～赤褐色砂質土（風化花崗岩）



Cトレンチ土層
38　木根
39　表土（腐植土）
40　黄褐色砂質土（締まりない。墳丘の2次堆積）
41　灰褐色砂質土（マサ）（墳丘、地山の2次堆積）



Bトレンチ土層
1　表土（腐植土、墳丘流土）
2　表土（腐植土）
3　暗黄褐色土（締まりが無く暗色。墳丘流土か）
4　明赤褐色土ブロック混黄褐色土（墳丘流土か）
5　暗黄褐色土
6　赤色土混黄褐色土
7　赤色土混黄褐色土
8　明黄褐色土（砂質土。硬質）
9　赤色土混黄褐色土
10　木根
11　黄褐色砂質土（軟岩質）
12　黄褐色～灰白風化花崗岩（地山）

Fig.20　2号墳墳丘断面図（1/60）

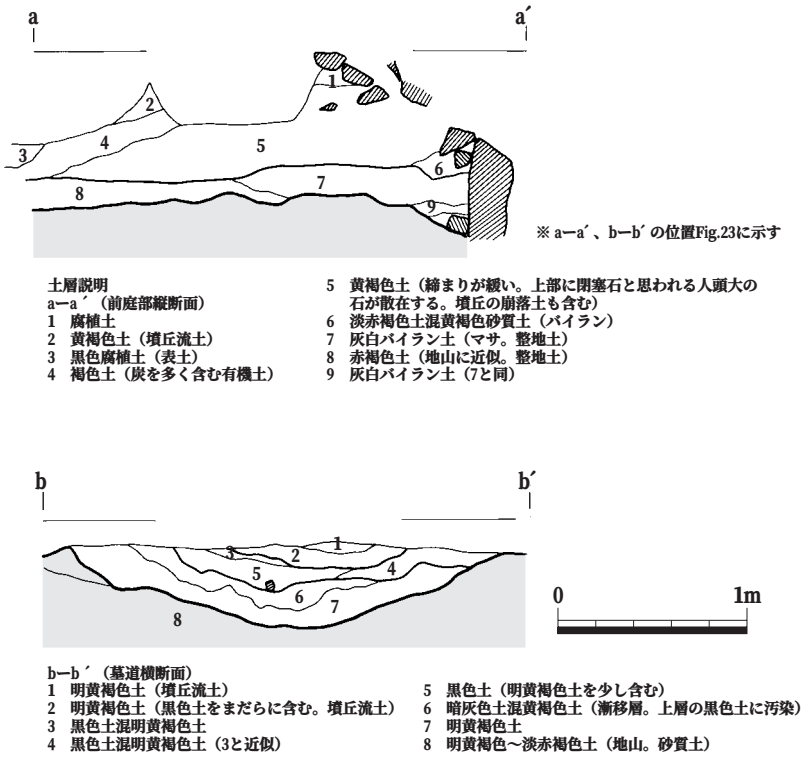


Fig.21 2号墳前庭部、墓道断面図（1/40）

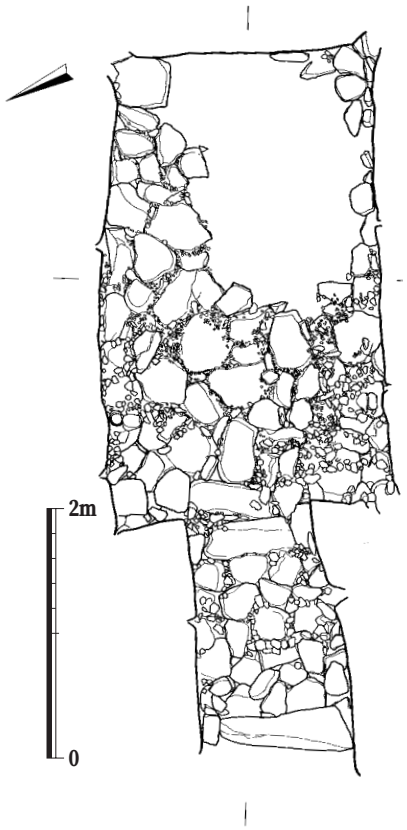


Fig.22 2号墳上面床面実測図（1/60）

略方形プランを呈す。左側壁側に広くみえるのは削平により右側壁側の掘方上部が切られているためである。深さAトレンチで190cmを測り、掘方上端のレベルは奥壁の腰石上面、左側壁の２段目上面にあたる。奥壁側と右側壁側では削平を受けているが、傾斜を考慮すると、奥壁腰石の中位、右側壁腰石上面のレベルと思われる。掘方内埋土は前項の通りである。

玄室

奥幅207cm、前幅222cm、右側壁長361cm、左側壁長377cmを測る。腰石を奥壁に１石、側壁に３石配置するが側壁の袖石と接する腰石は長さを調整した小さめの石材になっている。両側壁の腰石は傾いているが、特に右側壁では木根に押され大きく傾倒している。また、右側壁の奥側２石の腰石は後世、矢が入れられ割られている。奥壁は床面からの高さ170cmの腰石１石のみが遺存する。

床面は下部に30～50cm大の平石を多く用いて敷き詰められている。平石間には細粒の風化した花崗岩が詰まっているが、敷石間の空隙に流入したものが残り本来、全体に撒かれていた可能性がある。更に、その上に10cm以下の角礫を敷いた２面構造になっている。上面の小角礫は遺物が片づけられている袖石寄りの左右側壁際に遺物と混じって検出された。この２面の敷石は接し、堆積土が認められず、１号墳同様に時期差のあるものではなく、一体の施設であると考えられる。

羨道部

幅は玄門102cm、羨門で126cmを測り、前庭部にかけてやや広がる。仕切石を含めた主軸長は180cmを測る。側壁は袖石を含め腰石２石で下部を構成する。床面は玄室同様の２面構造で玄室床面より約10cm高い。

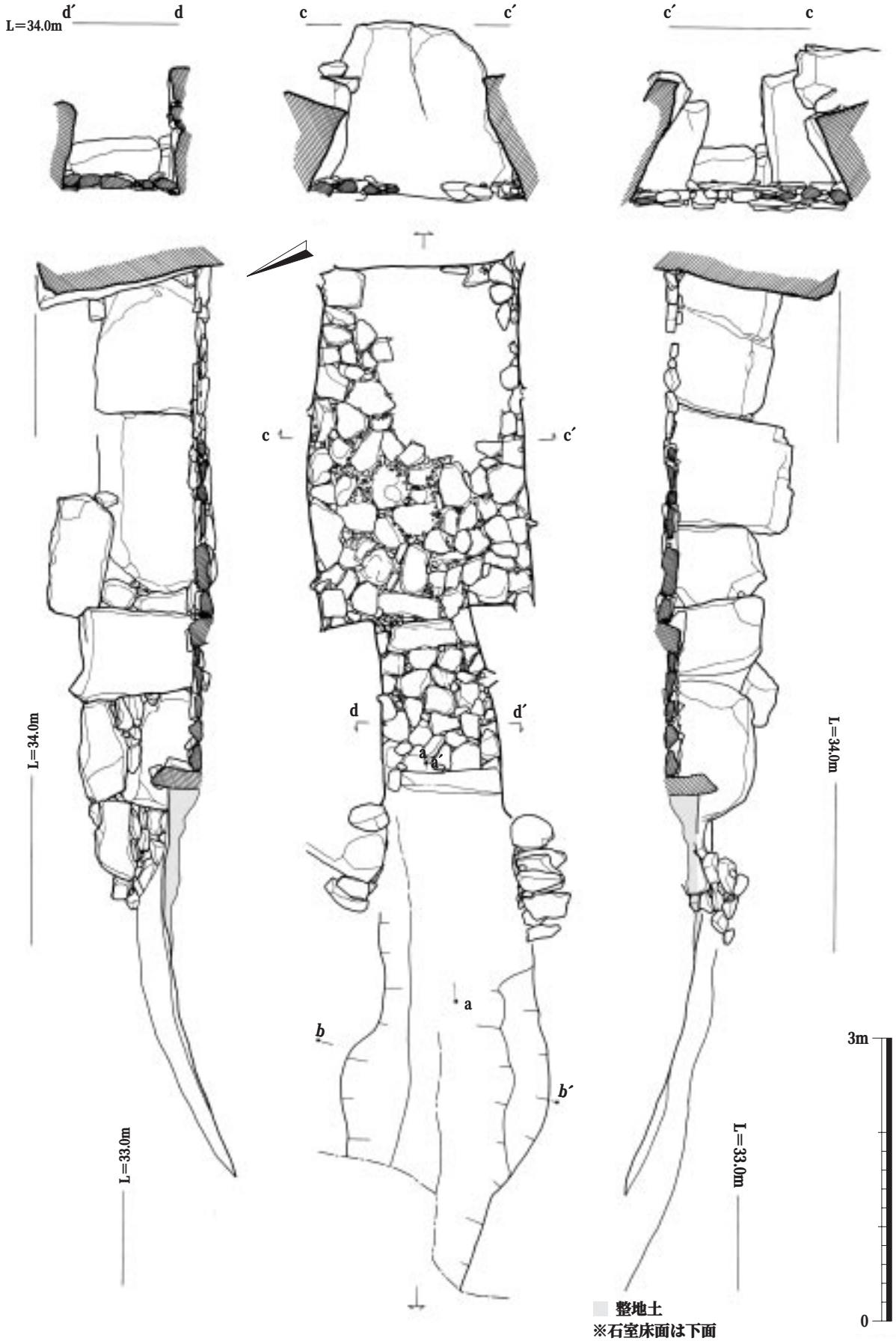


Fig.23 2号墳石室実測図 (1/60)

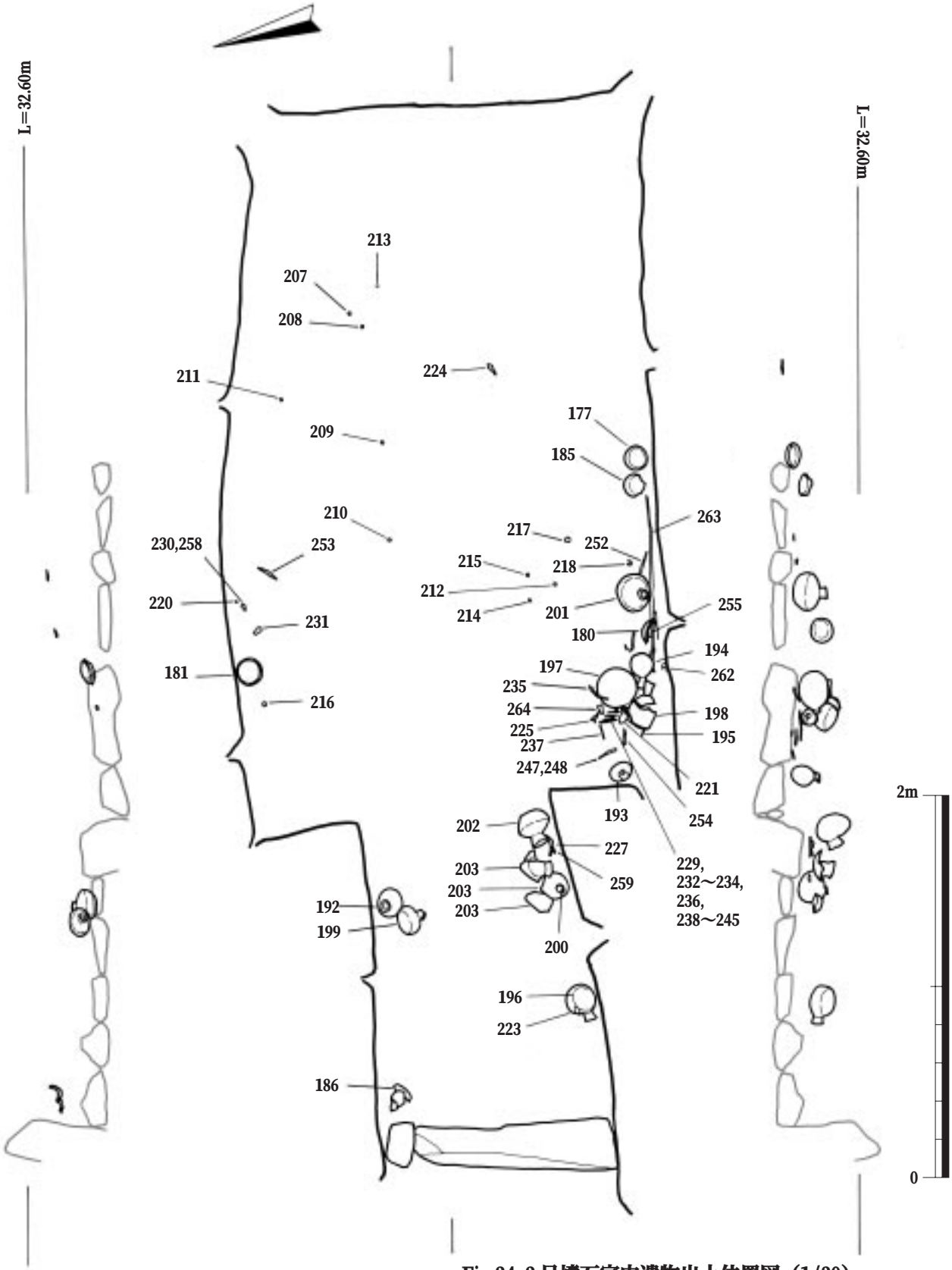


Fig.24 2号墳石室内遺物出土位置図（1/30）

前庭部・墓道

前庭部はハの字に広がり墓道に接続する。広がった最大幅は150cmを測る。側壁は墓道側に下底のレベルを上げながら積み上げる。石材は長軸50cm大の長い奥行きを壁面に直交するように置き、左側壁では羨道腰石上面近くまで小石材を積み上げた上に羨道２段目同様の横長の大振りの石材を置く。床面は地山上に層厚15cmの灰白色マサ土を敷いて整地する。墓道は西側の谷部に下降していく。

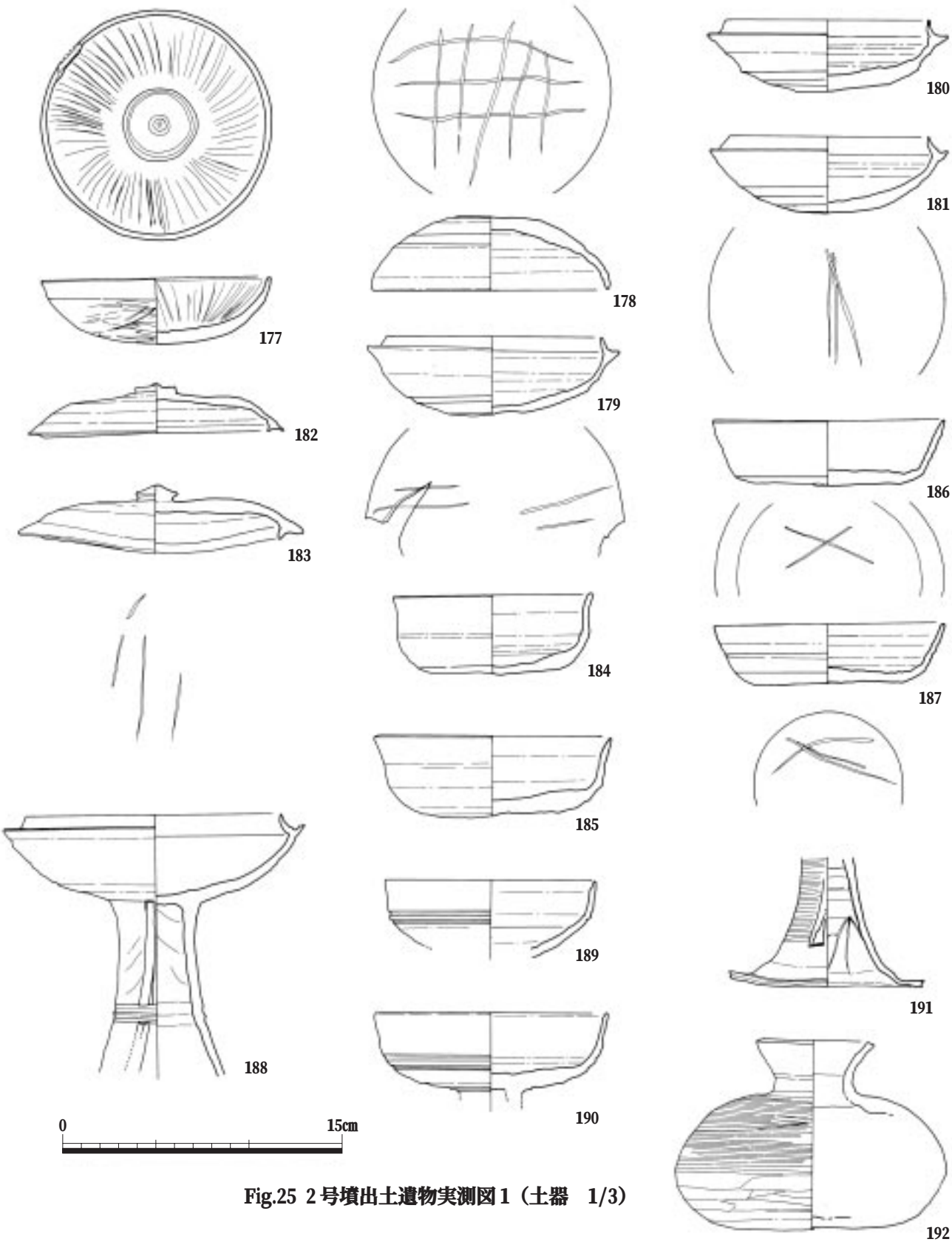


Fig.25 2号墳出土遺物実測図1（土器　1/3）

（4）出土遺物

出土状況

１号墳と異なり平瓶、提瓶をはじめ多くの土器が石室内から出土した。その大半は玄室と羨道の右側壁際に集中している。耳環は玄室中央部から１号墳より１個多い12個出土したが奥壁側が盗掘され

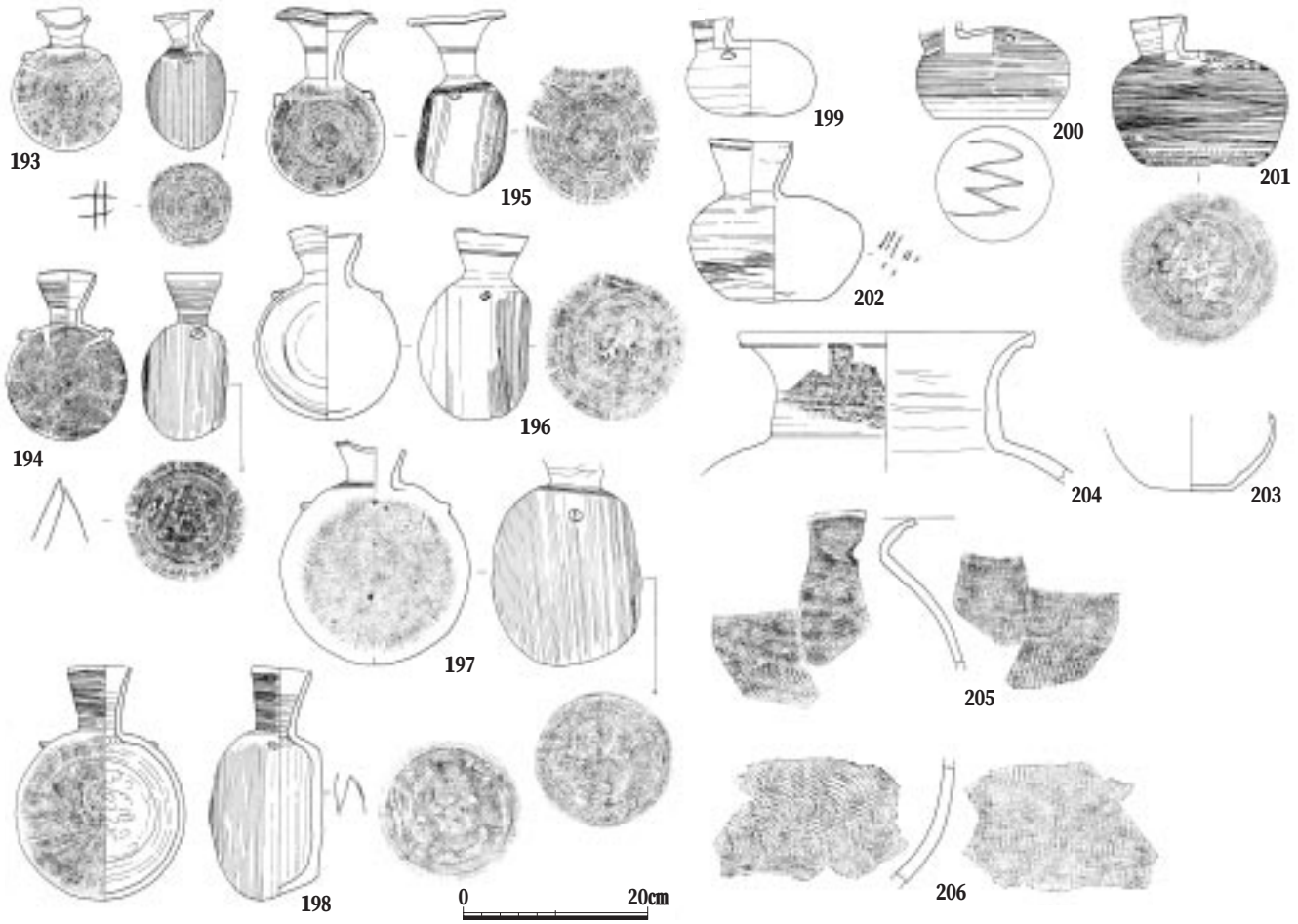


Fig.26　2号墳出土遺物実測図2（土器　1/8）

ているため、本来の総数は増えると思われる。出土地点、形態、製作技法から（207ー208）、（210ー211）、（214ー215）、（217ー218）のセットが考えられる。212と213は形態は似るが製作技法が異なり、出土地点も離れている。また、210と211も出土地点は離れている。耳環の出土地点からみれば、１号墳に比べ、追葬時の片づけや盗掘によって位置が動いた物が多いと考えられる。鉄刀は袖石寄りの右側壁際から出土。

土器　図示した土器のなか177が土師器である他は総て須恵器である。Fig.25の177、180、181、185は玄室内、184、192は羨道186、182、187、189は羨門閉塞部付近178、179、183、188、190、191は墓道からの出土。177の土師器坏身と185の須恵器坏身は中央右側壁際に並置し、赤、白のコントラストを意識したものと考えられる。177の外面は主にヨコ方向のミガキ、内面はやや左に傾いた縦方向のミガキを施し、口縁端部付近と底部はその上からヨコナデ若しくはヨコ方向のミガキを施す。中央部に当具痕とみられる径４cmの凹面があり更に中央にヘソ状に径１cmの窪みがある。凹み際および中心（ヘソ）内にロクロ痕が残り他はナデ押さえて仕上げている。内面調整後に外面ミガキのため用いたものか。赤褐色を呈し、外面スリップがかかる。胎土には２mm大の砂粒を含む。193～198の提瓶のなか196以外は玄室出土である。196、198は床面より高いレベルから出土。195の体部と頸部にはヘラによる列点文が施され、体部中央にヘラ記号を有す199～202の平瓶のうち201が玄室出土である他は羨道部出土である。202は高いレベルから出土。203は羨道部から、甕204は玄室埋土中、甕205は４

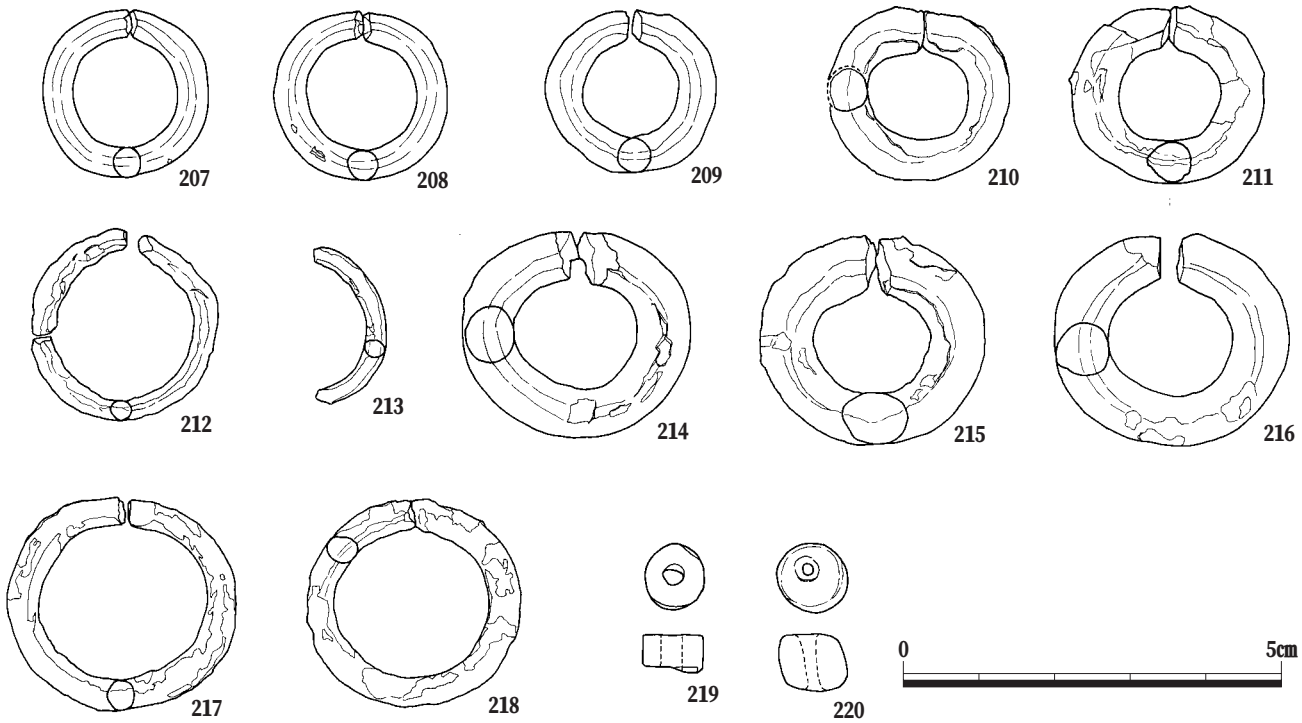


Fig.27 2号墳出土遺物実測図3（玉類1/1）

遺物番号	断面	形態	分析の所見	観察の所見	想定される製作技法
耳環207	中実	中細	芯材は銅を主成分とするが若干の鉛も含まれる。外表は強い金のピークの他、若干の銅、銀が認められる。	外表は若干破れているものの腐蝕は見られない。開口部は不明瞭ながら金属薄板の絞りが見られる。	銅芯－金（＋銀）薄板巻き
耳環208	中実	中細	芯材は銅を主成分とするが若干の鉛も検出される。外表は強い金のピークの他、若干の銅、銀が認められる。	外表は若干破れているものの腐蝕は見られない。開口部は不明瞭ながら金属薄板の絞りが見られる。	銅芯－金（＋銀）薄板巻き
耳環209	中実	太	芯材は銅を主成分とするが、砒素のピークも認められる。外表部では金が顕著で銀はほとんど見られない。水銀も含まれる可能性有り。	表層は殆ど剥落し一部に金が非常に薄い層状に残存する。開口部の状況は不明。	銅芯－鍍金
耳環210	中実	太	芯材部分の分析で銅と微量の鉛の他、水銀のピークが顕著。外表では金、銀、水銀を検出。	腐蝕により外表が半分ほど失われているが、芯材に金属薄板を巻いた構造が見られる。開口部は不明。	銅芯－銀薄板巻き－鍍金
耳環211	中実	太	芯材は銅の他、砒素も含む？。外表では（銅、）銀、金、水銀を検出。	全体に腐蝕が著しいが、芯材に金属の薄板を巻いている。開口部の状況は不明。表層残存部では淡い金色と銀色が斑になる。	銅芯－銀薄板巻き－鍍金
耳環212	中実	細	芯材は銅と若干の鉛、外表では（銅、）金、水銀、銀を検出。	腐蝕が著しいが、所々金が薄い層状に残存する。開口部の状況は不明。	銅芯－鍍金
耳環213	中実	細	芯材は銅と若干の鉛、外表では（銅、）金、銀を検出。水銀は検出されない。	全体に腐蝕が著しいが、芯材に金属の薄板を巻いている。開口部の状況は不明。	銅芯－金（＋銀）薄板巻き
耳環214	中実	太	芯材は銅の他に砒素を含む。外表では金、銀、水銀を検出。	芯材に金属薄板を巻いている。開口部は腐蝕により観察不能。淡い金色を呈する。	銅芯－銀薄板巻き－鍍金
耳環215	中実	太	芯材は銅の他に非常に明瞭な砒素のピークが見られる。外表では（銅、）金と若干の銀を検出。水銀については不明瞭。	全体に腐蝕が著しいが、芯材に金属の薄板を巻いている。開口部の状況は不明。	銅芯－金（＋銀）薄板巻き?（銀薄板巻き－鍍金の可能性もあり）
耳環216	中実	太	表層では銅のみ、表層が抉れた部分では若干の鉛もしくは砒素の微弱なピークを検出。	全体に緑青に覆われる。金や銀の加飾は見られず、開口部は平坦に加工。	銅芯のみ?
耳環217	中実	中細	芯材は銅を主成分とするが、鉛も含む。外表では金、銅、銀を検出。	全体に腐蝕が著しいが、芯材に金属の薄板を巻いている。開口部の状況は不明。	銅芯－金（＋銀）薄板巻き
耳環218	中実	中細	芯材は銅を主成分とするが、鉛も含む。外表では金、銅、銀を検出。	全体に腐蝕が著しいが、芯材に金属の薄板を巻いている。開口部の状況は不明。	銅芯－金（＋銀）薄板巻き

表2　2号墳出土耳環 分析・観察表

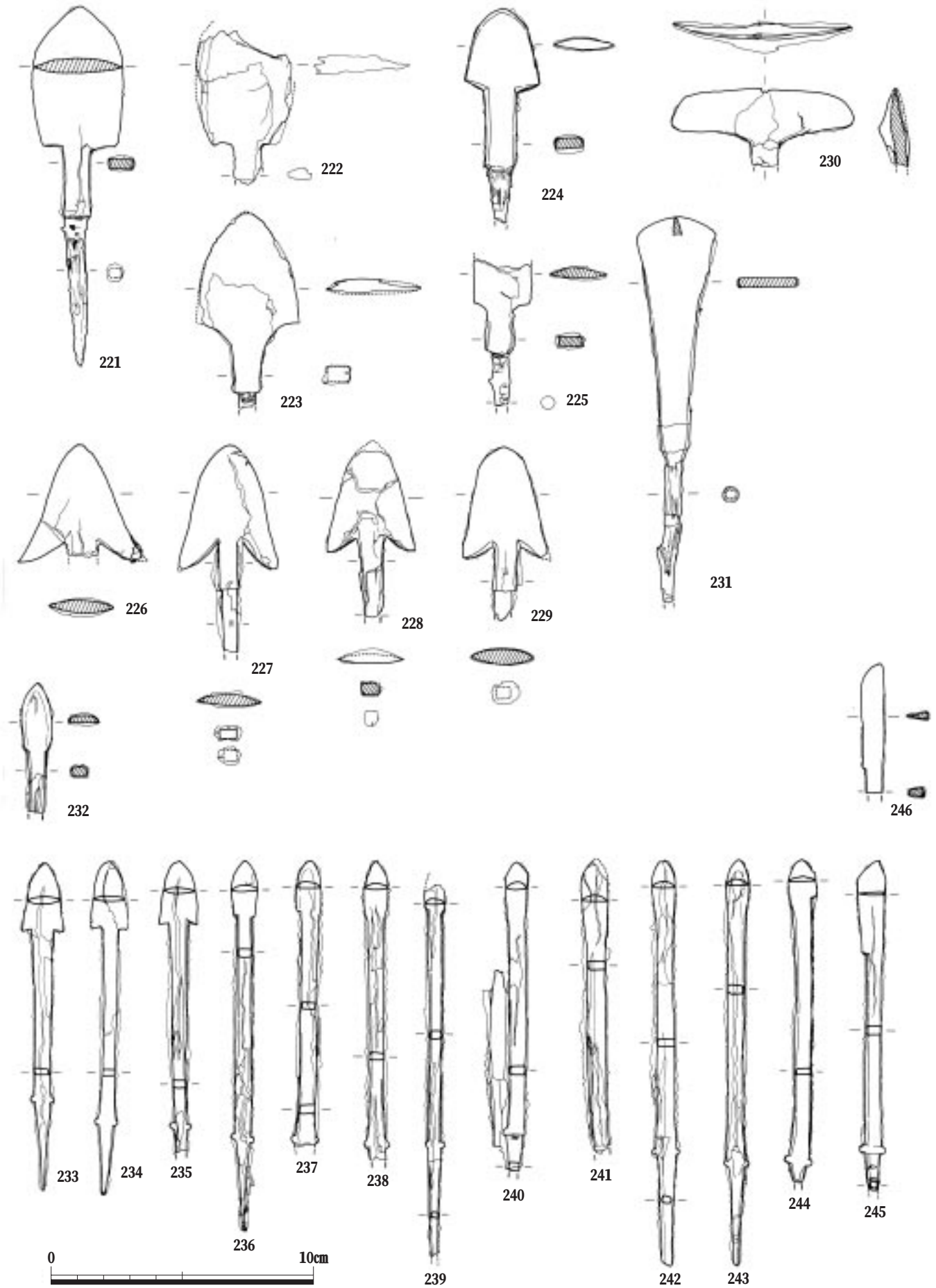


Fig.28　2号墳出土遺物実測図4（鉄鏃　1/2）

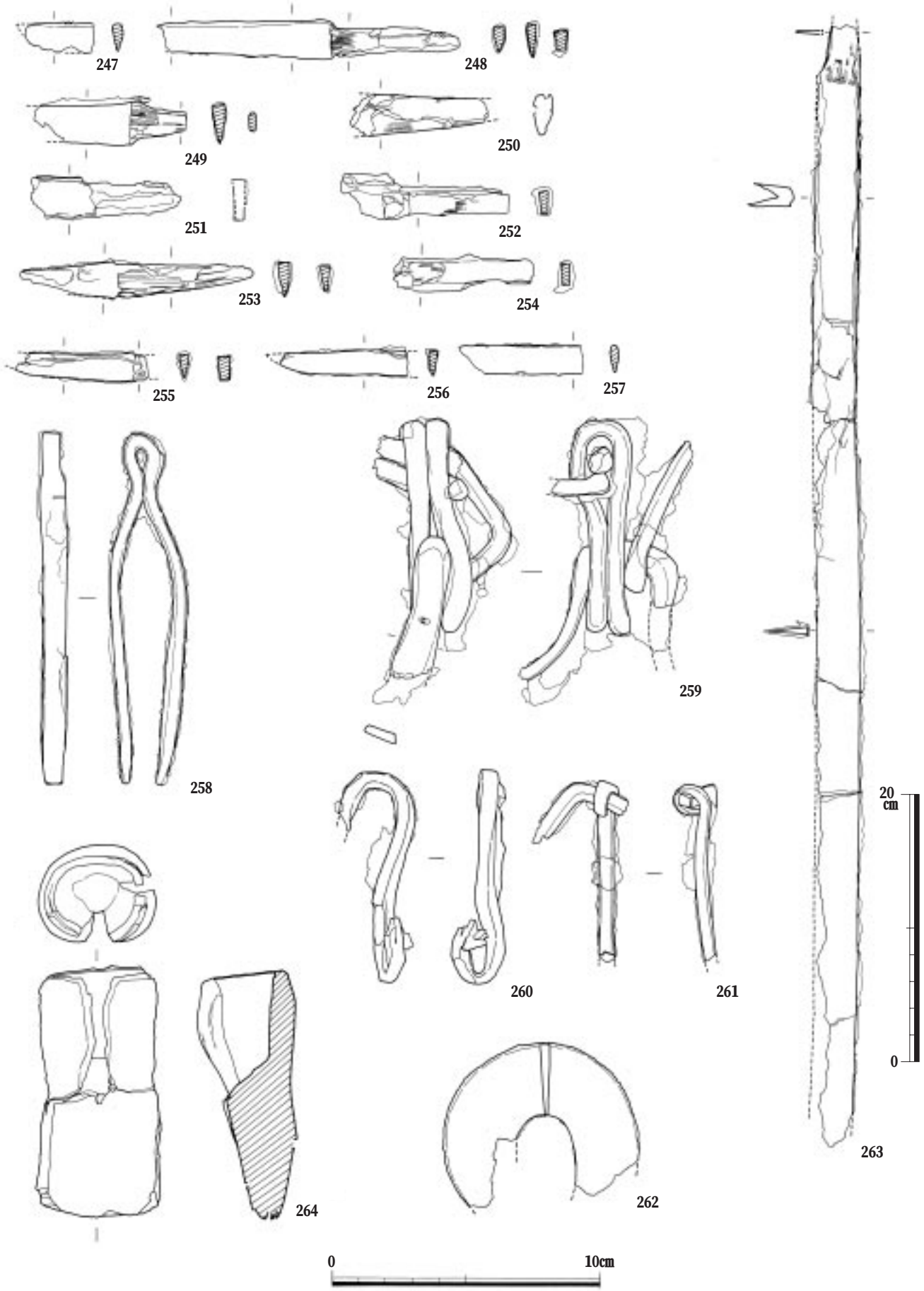


Fig.29　2号墳出土遺物実測図5（鉄器　1/2、263は1/4）

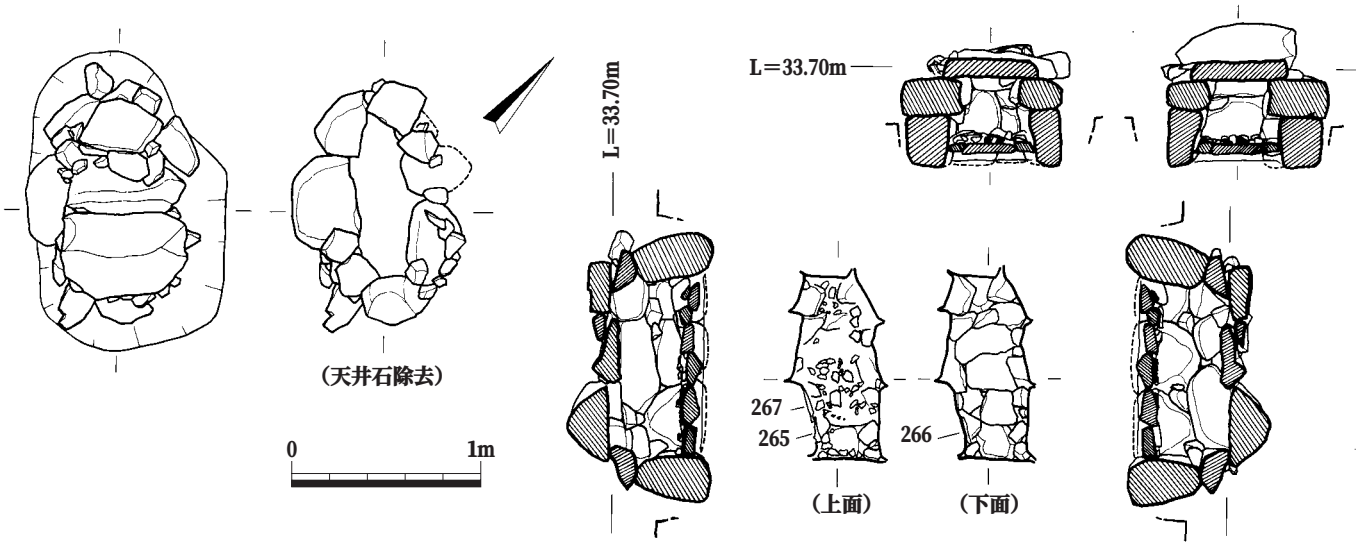


Fig.30 ３号墳石室実測図（1/40）

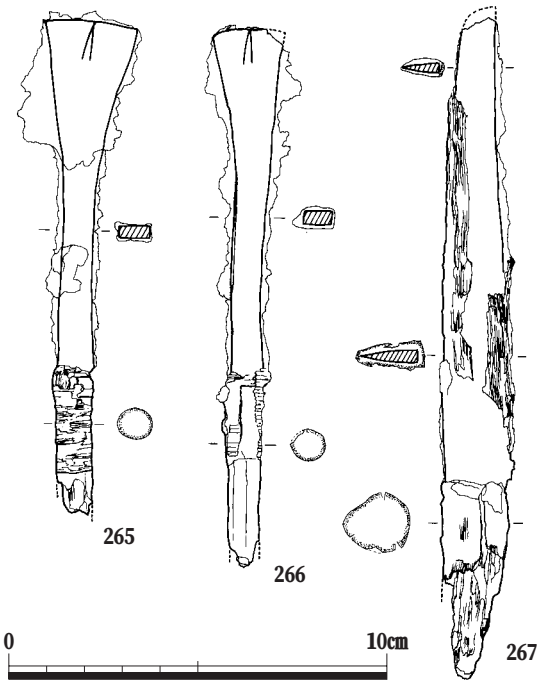


Fig.31 ３号墳出土遺物実測図（1/2）

区の墳端より下方の流土中、甕206は２区の列石状の石材に混じって出土。

耳環、玉類　耳環のセット関係については先述し、個々の詳細は表2の通り。219は玄室中央から出土した滑石製平玉、220は玄室出土の土製丸玉。

鉄器　鉄鏃のうち鏃身の形状が判る平根鏃は11個総て図示した。細根の長頸鏃は16個体出土。221、222は幅広で関が直に近い。鏃身形が柳葉形に近い223は１号墳出土に比べ幅広になっている。230は飛燕式で、鏃身に湾曲がみられる。方頭形の231は１号墳出土に比べ幅狭で刃部が湾曲する。。長頸鏃232～235は鏃身が比較的大きく断面両丸造りとみられ、頸部が他と比べ短い。篦被は棘状。236～243の長頸鏃の鏃身断面は片丸である。245、246は片刃の鏃身である。247～257の刀子は総て玄室出土。258は鑷子とよばれる毛抜き状の鉄器で玄室から出土。全長13.2cm、上部の捻った部分は幅を狭める。桧原２号墳からも出土している。259～261の鐙も桧原2号墳から類似したものが出土している。２連の兵庫鎖にハの字に反る吊り金具を取り付ける。吊り金具は遺存部の１箇所に孔を有す。260は兵庫鎖、261は上部の鉸具と思われる。262の鐔は鉄刀263の側から出土。263は鋒を奥壁側に向け、袖石寄りの右側壁に副葬された鉄刀である。錆が進み切先、茎が崩れて欠損している。遺存長84.0cmを測る。264は鉄斧。

３号墳

２号墳の北側墳端に位置し、Aトレンチで検出した。天井石を３枚架構し、側壁との間に小石をかませ固定と空隙の充填を行う。北側幅27cm、南幅32cm、長軸長95cmを測る。鉄鏃を南東壁側に2個体接するように置き、その前側に刀子を副葬する。主軸方向は２号墳石室とほぼ同じくし、副葬品が

置かれた南東方向の壁側が頭位とすれば、２号墳の奥壁側と同じくする。床面も２号墳同様に平石の敷石を設けた上に小角礫を散布する。出土遺物の265、266の方頭の鏃身を有し、茎部には木質が良好に遺存し、箭竹の上の樹樺が残る。267の刀子も鞘と柄の木質が良く残る。

Ⅳ　おわりに

石室構造、出土遺物等から１号→２号→３号墳と順次構築されたものと考えられる。出土土器とくに須恵器坏をみると、１号墳出土１は体部から口縁部にかけて弱い屈曲がみられるのに対し、２号墳出土のなかでは古い様相の坏身179は口径はほとんど変わらないが、湾曲している。同じⅢB期（6世紀後半）に含まれると考えるが、このような新旧の要素がみられる。多量に出土した鉄鏃、特に平根鏃も柳葉形のものは２号墳では長さが縮まり幅広となる。腸抉のものも同様の傾向にあり、１号墳では透かしのある古い様相をもつものも出土している。方頭式のものは逆に幅を狭め、３号墳は切合いからも最も新しい築造であるが、方頭式の形態変化からも時期差が伺える。追葬は１号墳は出土土器が少なくⅣ期までの経営は認められるが、以後は不明確である。出土土器が多い２号墳はⅥ期の７世紀後半までの経営が考えられる。

１、２号墳の特質として玄室が長く規模が大きいことがあげられる。耳環の数から５体以上の追葬が考えられるが、立地や玄室の大きさ、副葬品からみると比較的上ランクの階層にみられる直系家族集団が被葬者となっていると考えられる。墳丘規模は地形的な制約をうけ楕円状となるが、14～15m径の円墳と考えられ、通常多く見られる墳丘規模より大きい。造墓経営は１号墳の玄室奥壁際に玉類を多く伴った２体の被葬者の何れかから始まると考えられる。１体については銀製、金銅製の空玉を連結、垂飾している。福岡市内では初めての出土例であり、奈良県内でも前方後円墳や大型円墳からの出土例が多いといわれ（『高家一ツ橋古墳発掘調査報告書』（財）桜井市文化財協会1995）、被葬者の性格、階層を考えるなかで注目される。その他、鉄器中に１号墳では弓飾り、２号墳では鐔子や鐙が出土し、近接した桧原１、２号墳出土のものに類似する。また、鉄斧や鋤先など農耕具を１、２点副葬していることも類似し、１、２号墳羨道～墓道にかけて出土した鉄滓から鉄生産、農業と結びついた生業が伺える。桧原古墳群は同じ油山東麓に派生した丘陵尾根線上に立地する。１、２号墳の２基が調査され１号墳のⅠ期新相～Ⅱ期（MT23～TK15）に造墓が開始されるという。また、２号墳は後円部径が25～28m、全長40mの前方後円墳に推定されている。前方後円墳の正否は異論もあるが、大型古墳であることは間違いなく、造墓が東油山古墳E群より半世紀ほど早く始まる。今回調査の１号墳は次段階に各尾根線上に築造を始めていく古墳（『桧原遺跡』では15m以上の墳丘をもち、新たに造墓権を獲得した家長層として認識される）とみられ、３号墳は家長を継承し、新たな造墓を約束されていた小児を古墳石室同様に構築した石室に葬ったもので強い血縁と規制が見受けられる。

東油山古墳群

－東油山古墳Ｅ群第１次調査－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第823集

2004年（平成16）年３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８－１
（092）711－4667

印　刷　株式会社ナガシマ
福岡市博多区豊一丁目９－18
（092）482－7751

階層棚列	桁	段
540	2	5